Fate/Minecraft

天空ラスク

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マインクラフトをプレイしていた少年はある日事故によりその命を落とした……と思ったらＦＧＯの世界に転生していた！　何故か身についていたマインクラフト等の能力を駆使して特異点を攻略して世界を救う！

「おい、金リンゴ食わねえか？今朝もぎたてフレッシュプリキュアだぞ」

訂正しよう、これは彼が様々な人を面白おかしく弄りつつ世界を救うお話である。

ただいま全編加筆修正中、もうしばらくお待ちください。

目次

始まりの章
ある平穏な一日 ―― 1
拉致・置き去り・野宿の三連コンボ ―― 7
コマンド魔術 ―― 11
舞寺さんちのメイドラゴン化計画 ―― 15
カルデア到着（入るとは言ってない） ―― 19
カルデアは広いな大きいな ―― 24
怪奇！巨大殺人蟷螂の怪！ ―― 29
プロローグだよ！全員集合！ ―― 34
炎上汚染都市冬木
レフはなんということをしてくれたのでしょう ―― 37
乗り物作りとチームカルデア ―― 41
ある日の出逢い・表 ―― 45
ある日の出逢い・裏 ―― 48
イタズラのために鐘は鳴る ―― 55
ポップコーンマシンのハンドルっていくら回しても量は増えないよ ―― 59
濡れ衣装備の弓兵 ―― 66
やめて！ダイヤ剣で斬られたら戦争ですり減ったエミヤの精神まで斬られちゃう！お願い死なないでエミヤ！あんたがここで倒れたら桜やセイバーとの約束はどうなるの？　ライフはまだ残ってるんだから！次回エミヤ死す ―― 70
前回のタイトルを回収出来なかった事をお詫び致しましてここで謝罪致します。すまんかった。 ―― 75

何故こんなにも間が空いたのかは本人もよくわかっていないんだ ―――― 84
多分誰もやってない冬木ランチタイム ―――― 88
キチィの三分クッキング・準備編 ―――― 93

始まりの章
ある平穏な一日

人間は慣れる生き物だ。どんな不思議なことがあろうとそれが毎日のように続くとそれに違和感を持たなくなる。
「まだちょっとは気になるけどな」
「ん？今何か言った？」
俺の隣を歩くオレンジ色の髪の少女が振り返る。
「いや、なんで外国人の血が交じってない純日本人がそんなオレンジ色の髪の毛してるんだってな」
「うーん……偶然？」
咄嗟についた嘘に真剣に考え込んでいる彼女の名前は藤丸立香。そう、Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒと言うスマホゲームの主人公と同じ名前である。
「いや、お前は主人公属性でもついてるんだ多分。じゃなけりゃお前がそんな美少女面しているわけが無い」
「ねえそれ褒めてる？」
「……（ニッコリ）」
沈黙って素晴らしい。
さて、長くなったが話を戻そう。と言っても俺の隣に藤丸立香がいる時点で大体言いたいことはわかってくれると思う。
俺、転生しました。詳しいことは省くがまあ、マインクラフトっていうゲームをしていたら家に雷が落ちたんだ。そして使ってたパソコンが一気に強い電流が流れたせいなのかなんなのか、爆発した。
んで、気づいたら赤ん坊になってました。まあ『なんじゃそりゃあああ!?』となる訳ですよ。だが驚くのはまだ早いぜー！
なんと！魔術師の家系に産まれていたのだー！（爆発音）なんでも昔から細々と続いてる家系らしいのだ。そうしたら、俺も魔術使いたいってなるんだが、そこで俺の異常性が発覚した。
俺、マイクラの能力が使えた。物を壊してブロック化、ブロックの

設置、インベントリへの収納……まあ他にもあるがこんなところだ。
この能力のせいなのか視界がマイクラの画面なのが問題なのだが。全てが四角く見えるとかではないんだが、下の方にＨＰやらインベントリやらが見える。そして更に凄いのが「お、献血だって。リックも行こうよ」へいへい思考に割り込むでないぞ。
あ、自己紹介が遅れたな。舞寺理来（まいでらりくる）、よく呼ばれるあだ名はリック、魔術師もどきのマイクラ民ですよろしくー！
「リック早くー！置いてくよー！」
「いでででで、腕ちぎれりゅ～」
やだこの娘力強い……。
☆献血中☆
「アイムハングリ」
血を抜かれたので腹ぺこである。普通は血を抜かれた程度で腹は空かないが俺は空くのだ。
恐らくこのマイクラ視界が関係しているのだろう。マイクラをやっている人ならわかると思うが、ダメージを受けるとＨＰの隣に表示される満腹度？を消費してＨＰを回復するのだが、採血されている最中は常にＨＰが少しずつ減り続け、同時に満腹度を消費して回復し続けていたのだ。
つまり怪我して治すと腹が減る。
「何か食べに行こっか「ボリボリボリゴクン」何食べたの!?」
「リンゴ」
マイクラあるある、異常に速い食事。
「いいなー。私にもちょーだい？」
「はいよ」
右手に力を込めると何も無い所から少し角張ったリンゴが出現する。これもマイクラの能力による物だ。マイクラに登場する物は自由に作れるのだ。ん？（まだ）一般人の彼女に能力を見せても大丈夫なのかって？
「うーん、何回見てもタネがわかんない……まあいっか！」
彼女には大体手品で通していますのでご安心を。

そんな彼女は美味しそうにリンゴを食べている。
「ボリボリボリゴクン、ボリボリボリゴクン、ボリボリボリゴクン、ボリボリボリゴクン」
あ、これは俺です。
満腹度はリンゴ1つで4つ回復するので何個か食べないといつまで経っても空腹感が消えないのだ。あとこのリンゴ凄い美味い。
「なんであんなに速いんだろう……（ボソッ）」
「ボリボリボリ……ん？どしたん？」
何故かこっちを見つめている彼女に質問を投げかける。
「ううん、なんでもないよ？」
「そっか。ボリボリボリゴクン」
「……ボリボリボリッ!?～!?」
マイクラ能力の難点、途中まで食べても一旦食べる行動を止めると最初から食べなければならない。これは傍から見たら食べかけのものが何事も無かったかのように元通りになる怪奇現象の出来上がりだ。なので普段は普通に食べている。今回は腹ぺこ過ぎたのでノーカン。
んー、なんか隣が、具体的には彼女、いやその内沢山女子出てくるから彼女じゃ伝わりにくいな、主人公ちゃんが静かだ。
「……」
顔が青い、胸をどんどんと叩いている、食べかけのリンゴ。判定・リンゴが喉に詰まった。
「なんでや!?ここで死ぬ気かお前は!?まだ死ぬなよお前の活躍はまだ始まってないだろうが!?」
主人公の背中を強めに叩いていると、ゲホッ、と大きく咳き込むと同時に詰まっていただろうリンゴの破片が口から飛び出た。
「し、死にかけたよ……」
「午後3時20分、リンゴ詰まりで藤丸氏死去」
「その死因はちょっとやめて……」
仮に死にかけても俺からしたらポーション投げれば即体力回復出来るからセーフなんだが、窒息とか回復しても意味無いやつはご勘弁

願う。……牛乳飲めば窒息の状態異常も治るのか？
「そういや、このあとどうする？」
「んー、少し買い物したいんだけど、私財布家に忘れてきちゃったんだよね～」
「じゃあ今日の所は解散でよき？」
「よきよき。また明日会おうね！」
「おう、んじゃーなー」
互いに手を振って帰路に着く。
とりあえず家に帰ったら窒息は牛乳で治るのかの実験をしよう。
☆帰宅中☆
「ただ～いま～」
少し古びた木のドア――実は魔術的なセキュリティが掛けられている――を開け中に入る。
足元を見ると、脱ぎ散らかしてある高そうな紅白スニーカーがあった。
綺麗に向きを直してから靴箱に置いてあった置くタイプの消臭剤を靴の中に突っ込んでおく。ちゃんと片付けないからこうされるのだ。
「ただ～いま～！」
「おか～」
リビングのドアを開け、返事がなかったので先程よりも大きな声で言ったらやる気のない返事が返ってきた。
テレビの前のソファに姉が寝転がっていた。少し汚れた本を読みながらリラックスしている。
「何読んでんの？」
「落ちてたエロ本」
「拾うな読むな持ってくるな」
「今時ってこれで巨乳って言うんだな～」
自前の双球を下から手のひらで持ち上げるように動かしている姉に真夏のクーラーの風（施設内の鳥肌立つレベル）並に冷たい目を送ってやろう。

「止めたれ、比べられる人が可哀想だ」
「私が魅力的にだからなー」
「変人と比べられるのが可哀想だ」
「うおい!?誰が変人だよ!」
「それは、キミ☆Ｙｅａｈ」
「誰がそのネタわかるんだよ」
「少なくとも目の前の姉はわかってる」
「あ、バレた?」
　まあ、モ○スターズ・インクのエンディングのラストのラストのセリフだからなぁ……そこまで見てる人も覚えてる人もあまりいないだろうな。
「てか、今日仕事はいいのか?」
「だーいじょうぶだってー!これが一つ売れる度に私の懐は豊かになるんだからなー!」
　ヒラヒラと動く手に持っているのはもう見慣れたスマホ。
　そう、スマホ。この世界ではスマホを創ったのは林檎社では無く目の前の姉なのだ。
「そんなに金が有るなら髪切ってこいやー」
「んー?そうだな。そろそろ切るか~!」
　太陽の光を固めたような綺麗な金髪も手入れが雑なので宝の持ち腐れだろう。と言うより手入れしてないのに何故そんなにサラサラツヤツヤなのか。
　そんな時に我が家のチャイムが鳴った。
「リクー、行ってこーい」
「たまには働け」
「働いてまーす」
　姉の妄言を無視して玄関のドアを開けると、少し、いやかなり怖い人がいた。
　筋肉質・男性・スキンヘッド・黒サングラス・黒スーツ。こんな人がいきなり来たら怖くない訳が無い。
　だが、知人なのでそんなに怖くない。

「おー鷹羽(たかば)さんじゃないですか。どーしましたー？」
「実は、社長がまた会社を抜け出しまして……」
　この人は姉の会社で働いている社員の高羽さんである。姉は優秀なのだがやらかす事もある為この人がお目付け役となっている。その為会社での地位は高い方である。
「あー今居ますよ」
「……失礼ですが、家の中に上がらせて頂いても構いませんか？」
「どぞー」
　家の中に上げると、迷うことなく――何度か来ているので迷う訳も無く――リビングに到着した。
「リクー誰だった……ゲッ、タカ!?」
　読んでいた本から顔を上げて高羽さんを確認した瞬間、姉の目が見開かれた。
「社長！まだ本日の業務は終わっていませんよ！」
「えー、明日やるから……」
「今日、今、スグです。さ、戻りますよ」
「いーやーだー！っておい何処触ってんだ変態！」
「安心してください。私は社長を乙女として見ていませんので」
「失礼だなこいつー！嫌だー助けてー！」
　哀れな――――いや自業自得か？姉は高羽さんに米俵のように担がれ連行されていったのだった。
「嵐は去った……」
　ポツリと呟いた言葉は静かな部屋によく響いた。

拉致・置き去り・野宿の三連コンボ

いきなりだが俺は飛行機の中にいる。しかも家で寝てたのに目覚めたらいきなり飛行機の中に居たのである。

辺りを見回すと、呑気に寝ているオレンジ髪の少女の姿が見えた。その傍らには古めかしいローブを纏った人物やらコスプレっぽい制服を来ている男性やら怪しい人達がいる。ここで俺は思い出した。

(そういえばＦＧＯの主人公って拉致されてカルデアに来たんだよな……と)

つまり拉致に巻き込まれている訳なのだが、何故自分までここに居るのだろうか?誰かに話を聞きたいが全員が何やら不機嫌そうな顔なので非常に言い出しずらい空気が生まれている。まあ俺には関係ないがな。

「へい、そこのローブの白髭のおっさん」

「何だ、馴れ馴れしいぞ人形が」

人形……確かに俺はイケメンだねーとか美形だねーとか中性的だねーとか良く言われる。だがなあ、毎日言われると飽きるわあっ!?特に姉ぇ!顔整ってんだから女装しても似合うでしょ?って強引に制服(女性用)着せるの止めろぉ!あと笑いながら写真撮るなよっ!魔術師なのに何故普通にカメラの連写機能使いこなしてんだよ!

「ああ、至急準備してくれたまえ……どうした?まさか人に話しかけておいて何も言うことはないとは言うまいな?」

誰かと話していたおっさんがこちらに向き直った。

「ああ悪いな。考え事してた。おっさん誰なんだ?この飛行機何処行き?」

おっさんはやれやれと言いたげに肩を竦めると、

「君に教える義理は無いのだが、まあ、凡人では無いようだし教えても構わないだろう」

気を取り直すようにコホン、と咳払いをした。

「これから向かう場所は『人理継続保障機関フィニス・カルデア』という所だ」

「ああ、あのカルデアか」
　液晶画面越しにお世話になってました。
「おや、君のような辺境の民でも知っているのか？なら話は早いな」
　いちいちこっちを貶してくるおっさん。日本に恨みでもあるのかと言いたくなる。
「君とあっちの彼女にはマスター適正とレイシフト適正が有ったのでな、どうしても連れて行かねばならなくなったのだ。納得してくれたかね？」
　なるほど、俺にも適正有っただけの話か……マジで？あのシリアスありカオスありなカルデアに連れてかれるの？どうにかして逃げれないかな……。
「まあ到着まではまだまだ時間がかかる。どうだ？飲み物くらいなら奢ってあげよう」
　おっさんがスチュワーデスからコーラを受け取り俺に渡してくる。
「おっさん気前いいねー！では遠慮なく！」
　ちょうど乾いていた喉を良く冷やされた炭酸が口の中をさながら侵略者のように一気に雪崩込み濃厚な甘みで舌を包み込んだ。美味でした。
「ふう、美味かった。んでおっさん結局誰なんだ？こんな所にいる時点で一般人じゃねえのは確定だけどな？最後までおっさんって呼ばれるの嫌だろ？」
「君のような田舎者魔術師に名乗っても仕方がないだろう？」
「はっはっは、そりゃそうだな。こちとら特に魔術師らしい活動してない魔術師（笑）だからな」
「寧ろ私の方が聴きたいね。何故君のような輩が適正を持っているんだ？とね」
「さあなー、俺も知らーん」
　暫くその調子で話していると、くらっ、と意識が飛びかけた。疲れたかな？
「どうした？急に眠くなりましたと言わんばかりの顔だぞ？」
「よく分かるなおっさん。エスパーだったりしちゃう？」

「伊達に人の顔を見てないからな。眠いのなら寝たらどうなんだ？」
「そうするわ……眠っ」
あ～意識が遠くなっていく～……。
「ふむ、この睡眠剤というのは結構効く物なのだな。もう少し買い足しておけば良かったな」
おい今なんて……すやぁ。
☆強制睡眠中☆
目覚めたら雪山だった件。どれだけ寝付きが良かろうと流石に雪山に入れば起きる。
「あのおっさんコーラに何か盛ったな？」
あの状況じゃ状態異常回復万能アイテム牛乳様も飲めやしない。あのおっさん策士だな。
一人愚痴りながらアイテムを四つ出現させる。地図、方位磁針、革のチェストプレート、ダイヤモンドの剣（エンチャント・火属性Ⅰ）だ。
地図でカルデアの場所を確認し、方位磁針で方角を確認。革のチェストプレートの内側にダイヤモンドの剣を仕込んで今来ている服の上から着る。
火属性のエンチャントが着いた物は触ると暖かい事は昔実験で知った。使い捨てカイロ（永久稼働）って所だな。
「歩くのダルイ……助けて主人公ちゃん」
カルデアまでの道のりはかなり長そうだ。
☆登山中☆
カルデアまでもう少しの所でダイヤ剣型カイロではどうにもならないくらいに体が冷えてしまった。そもそも雪山というのは完全防寒装備で来るようなところだ。カイロを身につけたところで根本的な装備が足りていなかったのだ。
「寒い、ヤバい、死ぬ、寒い」
あまりの寒さに語彙力が下がりまくった状態の俺にアイデアが降りてきた。
『そうだ、家作ろう』と。一度行動を開始すれば作業が終わるまでとても速かった。

右手にオークの木材ブロックを出現させると目にも止まらぬ速さで右手を振り続けた。するとどういうことか右手の延長線上にあった地面の上に一辺一メートルの立方体がどこからとも無く現れたのだ。右手を振る事にブロックが現れ、あっという間に簡素な小屋が出来ていた。窓も無く、飾りもなく、木材を豆腐の形に積みましたと言わんばかりの小屋だった。

さっさとドアを開けて中に入ると、風が当たらないだけでとても暖かく感じる。

もう少し体が暖まるまで動かない事にした。

カルデアまでの道のりは（気分的に）遠い……。

コマンド魔術

改めて地図を見直すと、あと五分程歩けば到着するであろうということがわかった。それはそれとして寒い。暖房と言えるものはカイロ剣、間違えたダイヤ剣しかなく、木材オンリーの掘っ立て豆腐小屋は外の冷気でゆっくりと冷えていく。室内の温度が零度になるのも時間の問題だろう。その前に体を最大限温めてカルデアまで行かなくては、そう決心して右手にブロックを出現させた。

それは、竈（かまど）マインクラフトにおいて金属の精錬や木炭製造、調理など使い所が割とあるブロックだ。

竈を床に設置して、下の空間に出現させた木炭を入れ、上の空間にこれまた出現させたじゃがいもを入れる。これだけで料理が出来る。焼いている間に竈の火で小屋の中が暖かくなり一石二鳥だ。

マイクラの竈はものの数分で焼き上がる。あっという間にベイクドポテトの完成だ。……とマイクラならそうなるがここで俺流のアレンジを入れる。右手に出現させたのはバター、マイクラには無い物であるが、これは市販品をインベントリに入れて置いたのだ。これを丸ごと焼いたのに何故か切り込みが入っているベイクドポテトに挟む。そして湯気が立ち上るそれに、はむっ、と齧り付く。

「あ～人生で一番美味いじゃがバターだ……」

ほくほく食感のじゃがいもにバターがいい味出している。やはり暖かい物を食べるのは良い。

「そういえばこのあとカルデアの外って焼き尽くされるんだよな……」

物語通りならば藤丸立香がカルデアに目をつけられた時点でカルデア行きと人理焼却ら確定だろう。

ふと、頭の中にアイデアが降りて来た。

とあるＭｏｄ……マインクラフトに新要素を追加するデータ……にドラゴンを仲間にするやつがあり、卵を孵す場所でドラゴンの属性が変わるのだ。つまり何が言いたいのかと言うと、今を逃すと氷属性のドラゴンは入手困難になる。そう思った俺は右手にあるブロック

を出現させる。それは知る人ぞ知るブロック、その名もコマンドブロック。使い方はコマンドを打ち込み実行する、それだけのシンプルな使い方ながらこれが世界に及ぼす影響はとても大きい。天候を変えることも個人を狙って仕留めることも欲しいものを生み出すこともコマンド次第で出来てしまう、機械仕掛けの神のような物だ。そしてこれが俺の魔術でもある。

「コマンドオン、モッド・ＤｒａｇｏｎＭｏｕｎｔｓ・スタート。アイテムクリエイト、エンダードラゴンエッグ」

音声認識を搭載したコマンドブロックが詠唱のように変換したコマンドを忠実に実行する。コマンドブロックが俺の魔力を吸い取り、一瞬振動する。いつの間にか俺の目の前に黒い卵が出現していた。それはエンダードラゴンの卵、だが本来には本来存在しない気配があった。

何故こんなことをするのかと言うと、俺はバニラのアイテムならいくらでも出現させられるが、Ｍｏｄで追加されるものは出せないのだ。それをコマンドブロックの持つ、言わば『世界に干渉する力』を利用して俺の魔力を使う事で解消した。エンダードラゴンの卵はバニラでは決して孵化しないが、ＤｒａｇｏｎＭｏｕｎｔｓというＭｏｄを入れると孵化するようになる。それをコマンドブロックで再現したのだ。そしてこれで出現させたものは強化される便利機能付き。言わばコマンド魔術と言った所だ。

卵を持ち上げてドアを開けると冷たい風が一気に吹き込んだ。

「寒っ!?……早く終わそ」

雪の上に卵を置く。後は卵が孵るまで待てばいいのだが、ここで問題が浮上した。

「これ、何時頃孵るんだ？」

そう、卵が孵るまでの時間が分からない。マインクラフトの生き物は成長が早いがそれでも時間がかかるやつはあるのだ。そんな時にはコマンドブロック。卵に向けてコマンドブロックを構え、

「コマンドオン、成長・成体」

コマンドブロックが俺の魔力を吸い取りコマンドを実行する。こ

れで卵が孵る筈だが、何故か俺の目の前に白い壁が現れた。
「はい？」
俺が唖然としていると、壁が動いた。いや、これは壁ではなく……
「これドラゴンかよ!?」
俺が想像していたのは普通のエンダードラゴンくらいのサイズだった。しかし実物は見上げる程の巨躯だったのだ。新雪のように白い鱗は一つ一つが磨かれた鏡のように光を反射していて、芸術品のようだ。
「なんでこんなデカいの……あ」
俺は一つ思い当たる節があったことに気づいた。俺の魔力を吸ったコマンドブロックで卵を主人公させたことにより卵が強化され、更にコマンドで成長促進したことにより二重の強化がかかっているということに。
「うわ、強化されすぎ？」
さっきまで入っていた豆腐小屋と比べても圧倒的に大きい、大き過ぎる。
「これ、どうやって隠せばいいんだ？」
そもそも竜種って今の時代だと激レア素材の山なのでは？……こいつ、狩られる!?俺が同情と謝罪の篭った目で見ていると、強化エンダードラゴン……長いから巨ドラでいいや。巨ドラがゆっくりと動き出した。
「やべっ!?こいつ懐かせてないから自由に活動するじゃん!?」
早くこいつを懐かせて動きを止めないとカルデアに見つかって面倒くさいことになる！
即座に両手にコマンドブロックを出現させる。右手に現れたのは橙色のコマンドブロック『インパルス』。左手に現れたのは紫色のコマンドブロック『チェーン』。
この種類の異なる二つのコマンドブロックをくっつけた状態で詠唱を開始する。えーっと、確かこいつ魚で懐いたよな？
「コマンドオン！アイテムクリエイト・魚！」
俺の魔力がインパルスに吸われていき、コマンド通りに魚が出現す

る。だがそれで終わりではない。インパルスに蓄えられた魔力がチェーンに移動し、チェーンの機能が作動する。
今俺の目の前に魚が二匹落ちている。しかし気づけば五匹、十匹、二十匹と目を疑うような速度で魚が増えていく。これがチェーンの機能、コマンドの再実行だ。俺が魔力を注ぐ限りチェーンがインパルスに打ち込まれたコマンドを実行し続ける。俺の目の前に魚の小山が出来上がった所を見計らって魔力供給を止める。コマンド魔術で
「おーい！ドラゴンさんよおおおおっ！魚が食いたいかあああああっ!?」
危ねぇ!?一緒に食われる所だった!?
巨ドラは魚の山に頭を突っ込みみるみると平らげていく。
「あ、俺があげないと懐き判定されないじゃん」
新しく魚を右手に出現させて巨ドラの口の辺りに投げ込む。十匹くらい投げてようやく成功を表すハートが巨ドラの頭上に浮かんだ。
「いやしかし、こいつ結局どうすれば……ああ、良いアイデア思いついた。」
そうだ、メイドさんにしよう。

舞寺さんちのメイドラゴン化計画

「おーい聞こえてるかー巨ドラー。お前今からメイドさんにするからなー」

そう呼びかけると、グルグル……と返事が返ってきたのでＯＫとする。異論は認めん。

なにせ今からこのどこかの神話に出ててもおかしくないような迫力の巨龍をメイドさんにするのだ。前半と後半の文章の繋がりの無さよ。これには本気にならざるを得ない。バレたら世界的に即アウトなレベルのやつをバレないようにメイドさんにしなければ待って笑いそう。

首を左右に振って邪念を散らす。これから行うのは俺もやったことが無い領域の魔術なのだから真剣にならねば……いつかバラした時のリアクションを愉しむためにもっ！

カモン『インパルス』！俺の声に応えたまえっ！

「コマンドオン、モッド・ｌｉｔｔｌｅＭａｉｄＭｏｂ・スタート。続けてモッド・Ｌｉｔｔｌｅ Ｍａｉｄ Ｄｒａｇｏｎ・スタート！」

インパルスが魔力を吸い込み、コマンドを実行する。インパルスが一瞬強く輝き……、何も起きなかった。

「あれ？何でだ？」

これでメイドさんになると思ったんだけどな……何か足りないのか？メイドさんを雇う為に必要なもの……あ、砂糖か！

「巨ドラさんよおおお！口開けてくださあああああい！甘ぁい砂糖はいかがですかあああああぁぁ、……あ？」

巨ドラが『甘い砂糖』という単語に反応して俺の目の前に大口を開けてスタンバイするまでにかかった時間、約０．５秒。

今俺の顔少し引きつってると思う。目の前に一瞬にして巨大な顎が開かれた状態でスタンバってたら誰でもなると思う。

右手に砂糖を大量に出現させると、手のひらに収まりきらずにサラサラと零れてしまった。

「あ、零れてっ!?」

その瞬間、俺は何故か小屋の中に逃げ込んでいた。何か得体の知れない恐怖に襲われたのだ。ドアを閉めた途端に轟轟と風の音がした。先程までそよ風すら吹いていなかったというのに。やがて音が止み、恐る恐るドアを開けた。

雪が無かった。雪が大きな扇形に無くなっている。その扇形の根元には……、

「ボリボリボリボリボリボリボリ」

何かを口いっぱいに詰め込んで頬が大きく膨らんでいる少女の姿があった。

新雪のように白い長髪は太陽の光を反射して雪の精霊のよう、人形のように均整の取れた顔、吸い込まれそうな大きな青い瞳はまるで晴れた日の空のようだ。そして白と黒のメイド服に身を包んでいるがその絶世と言える肢体は隠しきれていない。まさに美の世界から飛び出して来たような美少女が俺の事を見つめていた……多分、口いっぱいの砂糖を咀嚼しながら。

「なんかもう色々と台無しだなお前は……」

「ボリボリボリボリ、ゴクンッ。うるさいぞご主人（ますたー）」

「キェェェェェェアアアアアアアシャアベッタアアアアアアアア!!」

「うるさいと言っている、そんなこともわからないのかご主人（ますたー）」

小鳥のような可愛らしい声で毒が出てきました。

「ああ悪い悪い。色々と物事が起こりすぎててな……それよりも、一つ質問がある」

「なんだ？いっておくが、うまれたてゆえにこたえられることはあまりないぞ？」

巨ドラメイドは舌足らずな声でそう返した。

「俺が小屋に入った後お前何してた？」

「さとうがもったいなかったから、すった」

すった…吸った？

「じゃああの綺麗に剥げた雪とさっきの強風はもしや？」

「うむ、わたしだ」

「お前だったのか」

見た目の割にどこかポンコツの匂いがする……。
「なんだ？ひとをジロジロとなめるようにみるとは、さてはご主人（ますたー）、へんたいというやつなのか？」
「見てねえよ!?そんな目はした覚えねえよ!?」
何だこの毒舌メイドラゴン!?俺のペースが乱されまくるじゃねえか！
「いや、この際どうでもいい。とにかく、俺はこの山の上ら辺にあるカルデアっていう所に行かなければならない。わかるな？」
「ふむ、ではなぜこんなところでみちくさをむさぼっているのだ？」
「寒すぎて頭がやられていた。色々と言いたいことがあろうが俺は聞かない。ほれ行くぞ、あと五分くらいで着くからな」
「やれやれ、おかしなご主人（ますたー）にめをつけられてしまったな」
肩を竦めてやれやれと言いたげに首を振る駄メイドラゴンをおいてさっさと歩き始める俺だった。
追いつかれて後頭部にドロップキックを食らった事は書かなくていいだろう。
二人（一人と一匹？）でトコトコと雪山を歩いていると、今更だが疑問が浮かんだ。
「そういやお前名前あんの？」
「あるわけなかろう。うまれたてほやほやのあかごドラゴンだぞ？」
「平然と毒を吐く赤子がいてたまるか。なら俺がお前の名前決めていいか？」
「すきによべ。よっぽどへんなものにならないかぎりはきにせん」
「関係ないけどひらがな多くない？」
「ほっとけ」
名前かあ……名前、名前……
「ポ」
「ポチとかいったらくいころすぞ」
「オモッテモオリマセンハイ」
「よろしい、ちゃんとかんがえるのだぞ」
「イエスサー！」

得意気な表情で腕を組んでいるメイドラゴン。腕に大きな果実が乗っているのは凄いと思う。そしてサーは男性に使うやつだとは気付いていないようだ。流石駄メイドラゴン、どこか抜けている。

それはそれとして真面目に名前を考える羽目になった。

……雪しか思いつかねぇ……。

なんか無いか？想像する、主人公達がピンチの時に颯爽（さっそう）と現れる俺達。そして正体を明かすメイドラゴン、強大な力を持つドラゴンが仲間になったと知ったならきっと主人公達の心に希望と立ち向かう勇気が生まれるだろう。……何だ、簡単じゃないか。

「決めたぞ、お前の名前は――」

敵を遊ぶように薙ぎ倒し、長い旅路を歩む主人公達に希望と勇気を与える。

「遊希（ゆうき）。それがお前の名前だ」

カルデア到着（入るとは言ってない）

遠目にカルデアが薄らと見えてきた時の事だ。
「なあ遊希、お前ドラゴン要素どこ行ったんだ？」
俺の隣を歩く遊希は良く言って美少女悪く言ってポンコツ駄メイドラゴンの遊希には外見的なドラゴン要素がまるで見当たらず、ただの美少女メイドさんになっている。
「だそうとおもえばだせるぞ？ほれ」
そう言った瞬間、バサッ、と遊希の背中から水晶のような翼が現れた。先程の今日ドラ状態を見た後だとかなり小さく、迫力も無い代わりに彫刻のような美しさと雪のような儚さを感じた。
「ふふ、すごすぎてことばもでないか。ほれほれ、もっとみたいか？」
翼を上下にゆっくりと羽ばたかせると、翼が動いた所にどこからともなく雪が出来て、ひらひらと地面に落ちてわからなくなった。
「凄い凄い、わかったから最大限ドラゴン要素隠しておけ。解剖されたくなかったらな」
「ひどくざつだな⁉」
「褒めただけありがたいと思え駄メイドラゴン、略して駄メドラ」
「だ、だめどら……」
しょんぼりと俯きながら歩く遊希の姿がまるで泣いている子供のように見えた。……、
「これでも食っとけ」
「ん？これはなんだ？ご主人（ますたー）」
「ただのクッキーだよ」
「くっきー……はむっ」
クッキーを口にした途端に笑顔になる遊希。うむ、やっぱりお前は笑ってた方が似合ってる。
「ほら、もうちょっとだ。行くぞ遊希」
「おう！」
元気になった遊希を引き連れてカルデアへと歩き続けるのだった。
☆登山中☆

特に何事も無く辿り着き、いざカルデアへといったところでそれは起きた。
「さて、遊希はどうやって入れるか……」
「ふほうしんにゅうというやつだな。まかせろ」
「何か手があるのか？」
無言で両手をこちらに差し出す遊希。
「違う、そっちじゃねえ。作戦はあるのかと聞いてんだ」
「なんだ、そういうことか。ならかんたんではないか。とうめいかポションをくれ」
「それを言うなら透明化ポーション！て言うか何で透明化ポーションなんか……まさか？」
透明化ポーション。飲むだけで姿が完全に透明になり、敵に完全に感知されなくなるという忍者が喉から手が出るほど欲しがりそうなポーションである。
「とうめいになってけいびをくぐりぬければいいのだろう？」
「いやそんなのでカルデアの警備を潜り抜けられる訳が無いだろ！」
「やってみないとわからないではないか！」
「それやって失敗したらどうするんだよ!?」
「すなおにメイドをつれてきたといえばいいだろ！」
「あっ」
確かに、俺は一応魔術師な訳でそれなりに歴史のある家の者。メイドくらいいても違和感は無いだろう。実際に名前は忘れたがアニメ版のＦａｔｅでメイドっぽいのがいたのだから。
「まったく、そんなこともきづかなかったのかこのバカご主人（ますたー）」
「あーへいへい馬鹿ですよーっと。んじゃ作るからちょっと待ってろ」
「さとうをだすようにポンッとだせばいいだろう？」
「普通に作った方が性能が良いんだよ。どうせやるなら万全の体制で、だ」
地面に木材を設置してその上に醸造台を置く。これってどういう仕組み何だろうとかいう質問は後で別の魔術師の人にぶん投げると

して、それに水入り瓶を一つセットする。あとは各々ｗｉｋｉで調べておくように！

☆醸造中☆

「ほれ、出来たぞ！」

「どれどれ、……なんかこう、のみたくなくなったな」

なんかオーロラみたいに光ってる紫色の液体は流石に食い意地張ってる遊希さんも飲みたくない様子。

「じゃあ俺が飲む」

「じゃあわたしものむ」

「どうぞどうぞ」

「はっ、はかったなご主人！」

「勝手に引っかかったお前が悪い。ささ、遠慮なく一気飲みせいや」

ほれほれ、飲むんだろう？瓶の先端部分を遊希の頬にグリグリと、やや優しめに押し付ける。

「くっ、のむしかないのか！」

「うん！勿論さ！」

「……」

涙目でプルプル震えられても困ります。

長い葛藤の末、ようやく瓶の封に手をかけた。コルクを抜くとキュポンと開封音と共に得体の知れない香りが広がり始めた。

遊希が『これ飲まないと駄目か？』と目で訴えているが俺は何も返事はしない。ただ笑顔で頷くだけだ。返事してるじゃんとかいうツッコミは受け付けません。

諦めた様に口元に瓶を運ぶがやはり抵抗はあるようでゴクリ、と息を飲む音が聞こえた。そして目を閉じて、一気に口に流し込んだあああああっ！

「……ん？なんだ、ふつうにおいしいな」

「マジで？どんな味なんだそれ？」

「パインサイダー」

それ何処の名産品？と思っていると、遊希の姿が消えていた。

「おおー。消えたな」

「なあ、みえないのになぜめがあう？」
「自分の胸に聞いてみな」
恐らく触っているだろう胸元の生地が凹んだ。うむ、やはりかなりデカい。
「って、ふくがきえてないぞ⁉」
「うん、だろうね。そういえば服消えない仕様なのさっき思い出したわ」
「どうするのだ⁉これではしんにゅうできないぞ！」
見えない誰かにぽかぽか叩かれてる感じがする。結構力が強いのか痛い、かなり痛い。
「まあまあ落ち着け餅つけ。取り敢えずその服を」
「ぬぐのか！」
さっそくやろうと言わんばかりに目の前でメイド服のボタンやら留め具やらが取れていく……って！
「いや脱ぐなよ⁉恥じらいはねえのか！」
「？ではどうするというのだ？」
「その服の上からこれを着ろ」
インベントリから革のチェストプレートとレギンスを取り出す。
「とくにエンチャントされているようにはみえないが？」
「俺特製特殊装備その一、スケールスーツだ」
「センスないな」
「よし、服脱いだ方が速いから脱げ」
「わかった」
「脱ぐな、やっぱ着ろ」
メイド服の上にスケールスーツが装着される。些かボリュームが増えたがまあ些細なことだ。
「で？これをきてどうなるのだ？」
「右腕の二の腕辺にあるボタンを押せ」
「こうか？」
ボタンを押すと、あっという間にスーツが透明化する。人が（ドラゴンが？）居るとわかっているのに全くどこか解らないってこれ隠れ

んぼ最強だよな。
「なんだ!?あたらしいそうびのこうかか!?」
　そんな物ではない。俺は魔術師の端くれ、スーツに術式を組み込みに組み込んで作った言わば『透明人間になれる服』だ。
「ぶっちゃけ姿を消すだけならスーツで良いんだが、気配までは消せないからな。持っててよかった」
「ご主人（ますたー）は、いがいにようういしゅうとうなのだな」
「もっと褒めたまえ、と言いたい所だがそろそろ透明化ポーションの効果切れるぞ。さっさと飲んで中入るぞ」
「わかった。しかしここにくるまでやけにながかったようなきがするな」
「多分そこらの二次創作の導入より長いぞこれ」
「まったく、だれのせいなのだ？」
「俺ではない事は確かだな。さ、飲み終わったか？」
「もうすこしまて。……なあ、もういっぽんくれぬか？」
「それジュースじゃねえからな？さっさと行くぞ、流石に体が冷えてきたからな」
「そうか、ノミタカッタナ……ではいくか」
　そしてようやくカルデアの入口に向かうのだった。

カルデアは広いな大きいな

『――塩基配列、ヒトゲノムと確認　――霊器属性善性・混沌と確認。ようこそ、人類の未来を語る資料館へ。ここは人理継続保障機関カルデア。　指紋認証、声帯認証、遺伝子認証クリア。　魔術回路の測定……完了しました。　登録名と一致します。貴方を霊長類の一員として認めます。はじめまして。どうぞ、善き時間をお過ごしください。……申し訳ございません。入館手続き完了まであと２４０秒必要です。その間、模擬戦闘をお楽しみください』

アナウンスを聞き終え、シミュレーションやら長い説明やらを終えた俺達はカルデアの廊下を歩いていた。

「うまくいったようだぞ、ご主人（ますたー）」

透明メイドラゴン化した遊希が俺の肩に手を置いた感覚がした。

「カルデアの警備は透明化ポーションで乗り切れる……これ俺達しか出来ねえな」

「まあいいではないか。いつでもふほうしんにゅうできるのだぞ？」

「まあもう出る機会はほぼ無いと思うけどな……にしても、部屋遠くね？」

説明が終わった後に告げられた俺の部屋までの距離が結構長い。もうかれこれ五分ぐらい歩いていると思う。

「そろそろつくのではないのか？」

「まあそろそろだろうな。あ、アレだな」

ドアを開けると最低限の家具が置いてあるだけの殺風景な部屋だった。

「よし、魔改造だ！」

「ドアをあけたしゅんかんにかいぞうせんげん、まさにたくみのきわみだな」

「止めろお前!?匠が来るだろ!?」

「ほんとうにしょうかんされたらわらうな」

「笑い事にならねえよ」

まずはベッドを取り替えてーの、ラージチェスト置きーの、作業台

置きーの嫁ぎーの。
☆魔改造中☆
部屋を改造して三十分程たった頃か、突如荒々しくドアがこじ開けられた。
「ここか!?……あれ?何でメイドさんが居るんだ?」
現れたのは白衣を纏った橙色の髪の男性だった。相当急いでいたらしく汗だくだった。しかし今この部屋には遊希しかいない。
「む?だれをさがしているのかしらんが、ノックくらいはしたほうがいいぞ?」
「ああっ、ゴメン!あの、舞寺理来っていう人を探してるんだけど知らないかい!?」
「ああご主人か。いまはネザーにグロウストーンをとりにいっている。すこしまってろ、よんできてやる」
そう言って遊希は黒曜石で出来た――紫色の光が漏れ出ている――ゲートに入っていった。
「ってええええええっ!?何だこれえええええ!?」
橙色の髪の男性が何やら驚いているようだが、その叫びも虚しく部屋に響くだけだった。
ゲートを抜けるとそこは石で覆われた狭い小屋になっていた。取り付けられた鉄のドアをボタンを押して開けると熱風が肌を撫でるように通り抜けた。空を見上げても天井があって空は見えず、ほんのりと薄暗い。辺りを見回すとそこかしこに溶岩が湧き出していた。探し人は天井付近でグロウストーンを掘っていた。翼を広げて彼の元へ向かうと羽音で気づいた彼がこちらを見た。
「ん?おー遊希。何で来たんだ?部屋で待ってるって言ってたろ?」
彼は自分がここにいることが疑問らしい。それもそうだ、先程彼に熱い所は嫌だから待っていると言っていたのにわざわざ来たのだから。
「いやな、ご主人をさがしているヘタレそうなやつがきてな。よびにきたのだ」
「そいつって白衣とか着てた?」

頷くと彼は少し驚いた顔をした。
「マジか。ロマニが俺の部屋に居んのか。そいつの俺の部屋見たリアクションどうだった？驚いてたか？」
「どちらかといえばわたしにおどろいていたな」
「あーそっちかー。確かになー、俺の部屋だと思ったらメイドしか居なかったらアレ？ってなるよなー」
彼は残念そうな顔をしながらポリポリと頭を掻いた。
「よっし、沢山取れたし戻るか。遊希ー、小屋まで運んでくれー」
「あるけばいいだろう？」
「お前が飛んで運んだ方が早いぞ？」
「しかたがないご主人だな。ほら、手を出せ」
彼の手を握ると、ぽかぽかと暖かい体温が伝わってきた。
「お前の手冷たっ!?」
「わたしにぬくもりをきたいしたのか？ざんねんだったな、わたしはこおりぞくせいだ」
「その内ネザーでエンドラメイド作るか……」
「そうしておけ。もっとも、ご主人のだいひょうメイドのざはゆずらぬがな」
「いつ代表メイドになったし」
「さっきだ」
「さっきかい！」
二人で談笑しながら、空の旅を楽しんだ。
（何時の日もこうやってご主人と共に在りたいな……）
☆帰還中☆
俺の部屋に戻ると、俺のベッドの片隅に勝手に腰掛けている橙髪男性の姿があった。
「お待たー？おおっ、ほんとにチキン顔だ！」
「いきなり失礼すぎないかい!?ていうか何処に居たんだ君！」
「時系列的には日本雪山カルデアネザーカルデアの順番だぞ」
彼は大きなため息を着くと、
「まあ、生きていてくれて良かった。君も実力測定に呼ばれているか

ら、ボクに着いてきて」
ふーん、実力測定ね？ていうことは何人かの魔術師とカルデアスと合体（物理）する所長が待ってると。……きっと日本出身だからと侮っているだろう、彼女達の驚く顔を想像するだけでメシウマですわ～。

☆移動中☆

「……時間通りとは行きませんでしたが全員集まったようですね」
あれが所長のオルガマリーさんですかねー？名前の通り近いうちに希望の花が咲くんだろうなー。
「では、改めて自己紹介をします。この人理継続保障機関・カルデアの所長を務めている、オルガマリー・アースミレイト・アニムスフィアよ。早速で悪いけれど今回この場に集めた優秀な魔術師三十八人の実力測定を行います。番号順に一～三十八の順番で始めます。一人ずつ仮想敵数体と己の魔術で闘って貰います。その後、戦闘結果を元にチーム分けを行います。何か質問は？」
その言葉を待っていたとばかりに一人の女性が手を挙げた。
「マスターナンバー十三ね。何かしら？」
「……招集に遅れるような魔術師以下の凡人が何故私達と同じ箇所に集められているのですか？」
お、なんか舐められてる。よっしゃ喧嘩なら買うぞ。半額シール貼っといてな。
「それには理由があります。彼の家の当主に頼まれて彼に試験を与えていたからです」
「え、何それ俺聞いてない」
あれ、何で俺呆れる目で見られているんだ？俺マジで何も聞いてないんだけど。
「……貴方何も伝えられていないの？」
「ＹＥＳＹＥＳＹＥＳ！」
あ、なんか所長の目が据わってきた。疲れてんのかね？リンゴ食べようぜリンゴ。

「貴方が飛行機内で話しかけた老人が居たでしょう？」
「居たなぁ」
　結局あのおっさん誰だったんだろう。
「その人、貴方の父親よ」
「マジで!?」
　え？嘘やん？全然似てなかったんだけど？あんな白髭も生やしてないしローブよりパーカー着てる人だぞ？
「貴方馬鹿って言われない？」
「こないだ雇ったメイドに言われたぜ？」
「……はぁ、もういいわ。話がズレたわね、本題に戻しましょう。彼をカルデアに招待して飛行機で運搬中、カルデアに彼の家の当主から連絡が来たのよ。『ウチの息子は一回危機に陥らないとやる気にならないから雪山にでも置いとけ』とね」
「何故辺境の一魔術師の要望に応えたので？」
「あー、まずその意識から正す必要が有りそうね……。ねえ貴方、マインテラクト家のことはご存知？」
「ご存知も何も、俺の先祖の家名だが？」
　日本に来た時に舞寺姓に変えたらしいがな。俺も良く知らんけど。
「なっ、マインテラクト家ってあの!?魔術という概念が生まれた時から存在しているというあのマインテラクト家の者ですって!?」
　わーすっごい説明口調。
「俺の家そんな歴史あったんだー。初耳だ～」
「貴方自分の事くらい把握してなさいよ……まあいいわ。それで、彼は生存に特化した魔術を使うと聞いたから雪山に置いてきたのよ」
　俺、どちらかといえば万能特化のマイクラ魔術なんだが……。
「他に質問は無いわね？では、実力測定を始めます！」
　まあ良いか、この実力測定でそれを示して度肝抜いてやろう。
「俺の実力を思い知りな！」
　シラケた目でこっちを見るんじゃない、俺が馬鹿見たいだろうが。

怪奇！巨大殺人蟷螂の怪！

あの後その場に居た全員で広い部屋に移動した。どうやら実力測定はこの部屋で行うらしい。

「それでは、実力測定を開始します。マスターナンバー一番は前に出てください」

所長が呼びかけると一人の男性が前に歩き出した。所長に指示されたところで止まると、男性の周りを光が照らしだした。光は床の上を何かをなぞるように動き、やがて出来上がった絵が立体となって起き上がった。

「へー、仮想敵ってああやって出来んのか」

なかなかにカッコイイ。今度やってみよ。そんな思考をしているといつの間にか戦闘が始まっていたようだ。せっかくの他の魔術師の戦いだ、一般的な魔術師の平均戦闘力は知っていて損はしないだろう。

男性は的確な狙いでガンドや他の魔術を放っているが、第二第三と待ち構えている敵の増援に攻撃が追いついておらず、囲まれて袋叩きにされる寸前で仮想敵がパッと消えた。

「計測終了、次！」

所長の声が部屋に木霊（こだま）する、彼女の顔を見るからにあまり良い結果は出ていないのだろう。その後も戦闘を見たが、何人か凄いのがいたくらいで他は期待外れだった。途中で「へいへ～い、もっと大魔術的なやつを打ってくれないかなー？そんなちんけな魔術だったら俺は越えられないぜー？」って煽ったら確かに威力や魔術の精密さは上がったが何故か終わったあと一部を除いて皆俺に向かってドヤ顔をかましてくる。不思議な事もあるもんだね。

「次で最後ね……ああ、貴方だったのね。まあいいわ、始めて」

所長の声が相手が俺だと気づいた瞬間にやる気が抜けた声に変わる。その対応に不満があるので後で弄るとしよう。

それはともかく俺の出番か。よっしゃ、そっこーで仕留めるとしよう。その前に

「へい！そこの魔術師共！何人か俺が生存能力重視で戦闘力そんな高くねえなって思ってるだろ！……いや頷くなよそこで！わかった！度肝抜いてやるから見てろ！」

そこそこやる気出して終わらせようと思ってたが、気が変わった。全員の腰抜かしてやろ。

所長の合図と共に仮想敵が俺に襲いかかる。だが、もうコマンドブロック（インパルス）は準備済みなんだよ！

「コマンドオン、モッド・Ｏｒｅ　Ｓｐａｗｎ・スタート！サモン・マンティス！目標指定・前方の敵対反応全て！」

右手に構えた『インパルス』が俺の魔力を吸い込み、コマンドを実行する。インパルスから奔流のように光が溢れだして何かの形を作っていき、やがてそれは出来上がった。

人を見下ろす巨体、血の如き複眼は眼下にいる仮想敵の事を餌としてしか見ていないだろう。それは捕食者としての、そしてれっきとした『ボス』としての強さがあるからだ。枝のようにしなやかな体と触れただけで切れてしまいそうな鋭利な鎌を両腕に構えたそれは前方の敵に隠さぬ殺意を叩きつけた。

『――――――――――ッ!!』

声なき雄叫びを上げ、巨大蟷螂（かまきり）『マンティス』は戦闘を開始した。

マンティスは無造作に一番近くにいた仮想敵に鎌を薙いだ。その場にいた魔術師達は仮想敵の首が落ちた事を認識し、ようやく斬られたのだと言うことを理解した。その間にも次々と仮想敵が目にも止まらぬ速さで屠られていく。仮想敵もマンティスを攻撃しようとするのだが、攻撃した時にはもうその場にマンティスはいない。それは戦闘と呼べる代物ではなく、では何かと言われればこの場にいる全員がこう言うだろう。

『蹂躙』。まさにその通りのことが起きていた。大量の仮想敵を一匹も逃さず文字通り『細切れ』にしたマンティスは役目を終えて光となって消えた。

後ろを振り返ると唖然とした表情の魔術師達が棒立ちしていた。

「はーいこれが辺境の魔術師さんの実力でーっす！皆さん、何でここ

まで差がついたか、明日までに考えてきてください！」
　俺の一言でイラっとした顔になったやつが何人かいたが、さっきのマンティスを出されたらどうしようもないとかいろいろ思考しているのか罵倒も魔術も飛んでこない。
「所長！次はなんかやる事ありますかい？」
「ヒッ……いえ、今日はこれで終わりよ」
　悲鳴が聞こえたような気がしたが、まあいきなり殺意溢れた巨大蟷螂出てきたら怖いだろう。マンティスはＭＯＤを入れると普通に序盤から出てくるボスモンスターだが、余程の装備を整えないと瞬殺してくる強ボスなのだ。ちなみに装備を整えすぎた人達はマンティスをトラップタワーと言う名の自動敵討伐装置に組み込んで経験値やらアイテムやらを稼ぎ回ってるとか何とか。
「そんじゃ、俺は部屋に戻ってるんで何かあったら呼んでなー」
　そう告げて俺は部屋に向けて歩き出した。さ、部屋の改造続けよ……ん？そう言えばＦＧＯ主人公いなくね？所長に聞くか！
　さっき出たばかりの部屋に戻ると、所長が俺に背を向けて魔術師達に話をしているところだった。……ニヤリと隠しきれなかった笑みが浮かぶ。そろりそろりと音を立てないように所長に近づき、
「おい」
「うぇえ!?って貴方部屋に戻ったんじゃなかったの!?」
「綺麗なジャンプだなー……ブフッ！」
「貴方ねえ……っ！」
　綺麗に飛び上がった所長を見たら笑いが漏れてしまった。
「失敬失敬、知り合いを探していてな。藤丸立香って人知らない？」
「藤丸立香？うーん、そんなの居たかしら？レフなら多分知ってるから後で聞いといてあげましょうか？」
「あ、結構です。ではまたそのうち会いましょう」
「え？何で急に他人行儀になるのよってちょっと！どこ行くのよー！」
　レ／フに付け狙われたらめんどくさいからです。あ、そうだ。さっきの対応の件ので弄ると決めたので髪の毛抜いとこ。

「痛っ!?ちょっと!いきなり何するのよ!」
「いやーこんな所にいて髪の毛の手入れ出来てんのかなーと。んじゃ、今度こそ失礼しやーす」
無言でガンド撃ってきそうな所長を背に部屋へと駆け出した俺だったのです。
部屋に戻ると遊希がベッドに寝転んで眠っていた。
「お前寝る時くらいメイド服脱いだら?」
「んむ?……ああ、ご主人(ますたー)、おはよ」
声を掛けたら目覚めたがまだ寝惚けているようだ。凄い眠そうな目のままだからか?
「おうおはよう。さっそくだがそのメイド服はパジャマの代わりじゃねーぞ?」
「しかたがないだろう。これしかふくをもっていないんだ」
あ、そうか。雪山産まれのドラゴンが服を持ってる訳が無い。むしろ物理現象を無視して現れたメイド服を着ていることが奇跡なのだ。
「確かに……すまん、用意してなかった事は謝る」
「いや、よういしてたらそれはそれでアレなことになるぞ」
女性用の服を常に持ち歩いている男子高校生……いや、変態やん。
「あとで通販で買っとくわ……」
「こんなやまおくにみせがあるのか?」
「そうじゃない。通販って言って買った商品を届けてくれるんだよ」
なおさらむりなのでは、いやご主人(ますたー)のツテがすごいのか?とうんうん考えている遊希を放置して俺はコマンドで出したパソコンをテーブルの上にセットした。自分のアカウントでログインするといつものサイト(アマゾン)が表示される。
「今更だが買い物にエメラルド使うのって贅沢ってレベルではないのでは?まあ有るからいいけど」
購入ボタンを押すと画面から光が飛び出て床の上に広がると、光の中からダンボールが現れた。
「遊希ー、届いたぞー」
「なにっ!?つーはんとやらはもうきたのか!?」

「そうだぞー。通販はあっという間に来るんだぞー」
つーはんはすごいな！と子供のように目を輝かせている遊希を後目にダンボールを開けると、
「うげっ」
そこに入っていたのは頼んだ覚えがない緑色のパーカー、フードに見覚えのある匠（あいつ）の顔がプリントされている。
「何故クリーパーカーが……頼んでねえのに」
「そのしたにもなにかあるようだぞ？」
クリーパーカーを退かすと頼んだ衣服が入っていた。
「コレ何で入ってたんだ……」
「おまけではないのか？」
「うん、もうそれでいいや」
あまり気にするとその内匠（ほんにん）が来そうだ。部屋の角に置いておこう。

プロローグだよ！全員集合！

　某所某日。調べた結果、いよいよ我らが藤丸立香がこのカルデアにやって来るらしい。本来なら倒れたところをイタズラしに行きたい所だがマシュとの出会いを考えると邪魔をする訳にも行かない。それよりも、もう間もなくＦＧＯのメインストーリーが始まるということはこのカルデアが爆発するということである。これはもしかしたらクリーパーカーの呪いなのかもしれない。
「ばかなことをいっているひまがあったら、じゅんびをしたらどうなのだ？」
　心を読まれた……だと？まあ確かに準備は必要だな。一回コフィンに入ったら爆発からの即レイシフトだからな。
「そうなると遊希はどうするか……置いていくっていう選択肢は……無さそうだなうんやらんからこっち見つめんな」
　何も言わずにこちらを見つめてくる遊希を引き連れてカルデアの玄関付近までただ歩く。念の為にお互いに透明化ポーションを飲んでいるのでレフにもバレる可能性は多無いだろう、多分。まあ割とすぐ死ぬし、復活もして来ないからそんなに強くはないだろ、うんきっとそうだ。
「おっ、来たぞ。我らが藤丸立香のご登場だ」
「どれ……ぐあいがわるそうだぞ？」
「カルデアに入る前にシミュレーションしたろ？あれ初見だと脳に来るんだよ」
「ああ、ご主人（ますたー）が『しじするのめんどーい！』とかいってかいまくそうそうにコマンドでそくしさせたやつか」
　シミュレーションとはいえチュートリアルってめんどくさくない？誰だって敵を即死させられるんならやるよな？
「それだそれ。あ、倒れたな。遊希、動くなよ。バレる可能性は消しておきたいからな」
「そもそものぞかなければいいのではないのか？」
「カルデアに来たら覗かない訳にいかないだるぉ？」

「いまとてもご主人（ますたー）にいちげきあたえたくなったぞ」
辞めてください。ドラゴンの一撃必殺なんて人が食らったら死んでしまいます。
「む？なすびのようなむすめがきたぞ？」
「おお、あれがリアルマシュか。初めて見た」
あの眼鏡ってデミサーヴァントになると外れるけど元々視力悪かったのかね？まあ掛けてたらすぐ破損するから外してるとかそんなだろうな。バトルって激しいから戦う度に眼鏡壊してたら大変だ。ん？ていう事はバトル中視力落ちてんのか？
「みろご主人（ますたー）。うさんくさいやつがでてきたぞ」
「レフだな。アイツは一応警戒しとけよ？もし勘付けられでもしたらどんな罠を仕掛けられるか分からんからな」
全身緑色のスーツってなんかアレだ、某有名配管工の弟のようだ。これで豊かな髭でも生やしてたら○イージって呼べたのに。
「ご主人（ますたー）、うごいたぞ。どうするのだ？」
「こっそりついて行くぞ。俺は途中でアイツらに合流するけど、お前は透明化ポーションを切らすなよ？」
「む？なぜだ？わたしもいっしょではダメなのか？」
「それだと、メイドと一緒にコフィンに入れないんだがそれでいいんだな？」
「ポーションはおいしいな！ポーションさいこうだ！」
それでいい。俺も準備をしようか。
右手に『インパルス』を出現させ、握ったままズボンのポケットに入れる。少々目立つが、まあ誤魔化せば良いだろう。遊希に先に行くと伝えて俺は主人公らの元へ歩き始めた。
「コマンドオン。スキンチェンジ・タイプＦＧＯ・スタート」
いきなりだが、マインクラフトはプレイヤーの外見（スキン）を自由に変えることが出来る。そのスキンは自分でも作ることが出来るのだが、もう言いたいことは分かるかな？では行こう！
と思ってたら混ざるタイミングを逃した……。現在中央管制室前でございます、幸いにも誰にもバレていないが、スキンを変えたまま

だと所長やほかのメンバーにも気付かれず、俺の名前がぐだ子の耳に入るだろう。そうしたら彼女は俺を探す筈だ。知らない所で幼馴染の存在を知ったら会いたくなるだろうからな。つまり、俺はぐだ子にバレず、尚且つ所長らには俺だと分かるようにしなければならない。それをするにはぐだ子に気づかれぬように中央管制室へと入り、所長に見つかるようにしなければならない。何か便利な道具でもあれば……ん？

「あ、スケールスーツで良いじゃん」

透明化ポーションと違い何時でも解除出来るスケールスーツならこの場において最適だろう。インベントリに入れて置いてよかった。

中に入ると魔術師達とカルデアスタッフが勢揃いしていた。どうやらロマニは居ないようだがぐだ子のマイルームにでも居るのだろう。最前列にいる目立つオレンジ色の髪の毛の少女をチラ見すると、俺の席へと着席した。ここまで誰にもバレていない、セーフである。後はスーツの電源をゆっくりとオフにすればいい。突然現れたら驚くが、いつの間にかいた位ならそれほどリアクションも無いだろう。ボタンを深く押し込み、ゆっくりゆっくりと指を離し…。あ、スキン変えたままだと誰だかわかんねえな、戻しとこ。

「……時間通りとはいきませんでしたが、全員揃ったようですね」

よし、所長にはバレてぐだ子にはバレてない、完璧だ。

『ご主人（ますたー）、わたしがきたぞ』

耳元に遊希の声が聞こえてきた。ちょっとびっくりした。

「よっしゃ、俺の傍から絶対に離れるなよ？」

冬樹で何か会った時のためにコフィンには二人で入っておきたいからな。あと話し相手の確保。

さあ、緑の匠（レフ）さんや、仕事の時間だぞ。

炎上汚染都市冬木
レフはなんということをしてくれたのでしょう

あの後起きた事をさっさと伝えると、ぐだ子が所長のビンタで気絶して運ばれて、俺らは説明会を最後まで聞いてからコフィンに入っています。あ、俺Ａチームでした。これぜって～レフ狙ってるよなー？あの肉柱め、次あったらゴジラもどきをけしかけてやろう。ていうかそれよりも俺今現在バレたら社会的に不味いことになるんですよはい。

「ご主人（ますたー）、だいじょうぶか？せまくないか？」

美少女ドラゴンメイドと同じコフィンにいる訳ですはい。しかも一人用な為密着状態なんですはい。正直に言おう。遊希のメイド服越しでもわかる程大きなお餅様が当たるのだ。今バイタルチェックされたら脈拍が早くなっているだろう。しかし決して顔に出してはいけない。ていうか顔が近いから離れてくれ頼むから。

「いや？俺は大丈夫だ。お前こそキツくないか？」

「もんだいない。わたしはこうみえてほそいからな！」

そうですね首の下腹の上以外細いですね良いから離れろ当たってるから！大きなお餅が潰れてるから！

よし一旦落ち着こう。

「へい遊希、ちょっと退いてくれ。喉乾いたからなんか飲みたい」

「わかった！」

離れた瞬間に右手に牛乳（バケツ）を出現させ、一気に飲む。ああ、落ち着いたわ～。

「そ、そこまでかわいていたのか？」

「ああ、もう大丈夫だ」

「それならいいのだが……なあご主人（ますたー）、たしか、このあとばくはつするのだろう？どうやってばくはつをぼうがいするのだ？」

「邪魔はしないぞ？したら物語が正しく進まないからな。こんな初っ端から物語が予想つかない方向に行くことだけは避けたいんだ」

「ならどうするのだ？」
「安心しろ。作戦ならバッチリだからな！」
　既にコフィンもエンチャントして耐久度を上げているのだが、念には念を入れるのだよワトソンくん。
　少し記憶を掘り出すと、確か爆発が起きるのはレフがロマニとの通信を切ってから二分後のはずだ。そしてぐだ子が中央管制室に到着するのが約五分後。つまり、通信を切ったら直ぐに避難、五分後に戻ってくれば無事冬木にレイシフト出来るという寸法だ。
『――ロマニ、あと少しでレイシフト開始だ――』
　耳を澄ますとコフィン越しにレフの声が聞こえてくる。どうやらもう通信は始まっているようだ。
「遊希、間もなく避難するが、心の準備はいいか？」
「ああ、いつでもできている！」
　その言葉を待っていた！
『――そこなら二分で到着できる筈だ』
　通信が終わった、今だ！
「コマンドオン、ワープ・移動対象・俺と遊希。移動目標・箱庭世界（マインクラフト）・スタート！」
　右手のインパルスが魔力を吸い込み、強い光を放ってコフィンの中は光で包まれた――――。

「うう、……ん？」
　瞼越しに感じる陽の光で遊希は目を覚ました。どうやら気を失っていたらしい。目を開けると、
「おおお……！」
　何処までも澄み渡る、果ての無き青空が広がっていた。
「おっ、やっと目覚めたか！全く、こんな草っ原で寝るくらいならちゃんとベットで寝ろよ」
　軽い雰囲気の声が頭上から聞こえてきた。振り向くと楽しそうな笑みを浮かべたご主人（マスター）の姿があった。
「まあそんなこたぁどうでもいい！遊希！」

彼は舞台の演者のように両手を広げ、
「ようこそ！俺の箱庭へ！」
そう高らかに叫んだ彼の顔は、子供のように無邪気な笑みを浮かべていた。

はーい、遊希が目覚めたので俺の世界を案内しようと思いまーす。五分しかないからさっさと行くぞー。
「てなわけであっちに見えるデカい建物が俺の家だ。まあ、メイドだからお前の家にもなるのか？」
「……おしろだ」
ポカーンと我が家を眺める遊希は普段の様子と違って少し滑稽だ。
我が家、もとい我が城を紹介しよう！まず外見は○イズニー○ンドの○ンデレラ城をイメージして作り上げたが、本物よりも増築してあるので大国の城や要塞のように見えるだろう。更に壁や屋根は七層構造になっており、かなり分厚い。そのせいで部屋の広さを確保する為により城が大きくなってしまった訳だが、万が一敵が来ても城ごと破壊される可能性はほぼ無いだろう、そのくらい丈夫になっている。
ぶっちゃけ何ブロック使ったのか分からんし数えたくもない。
「おいおい、まだ玄関にもついてないぜ？どうする？ここでのんびり五分待つか？」
「はっ、あ、いや、だいじょうぶだ。……わたしのほんらいのすがたよりもおおきいものがあるとおもってなくてな」
「この世界には最大高度が無いからな。その気になれば何処までも増築出来るぜ」
さ、お上りさんな遊希を連れて行くとしま『シュー……ドンッ！』
「ふわっ!?」
「あ、もう五分経っちまったのか……よし遊希。早く戻るぞ！」
「え、ご主人の家は――」
「後で暇な時間が出来たら最後まで紹介してやるよ」
ワープした時に別の位置に出ないように遊希の手を握ると、何故か遊希の顔が赤くなった。リンゴみたいになった遊希は置いといて、右

手にインパルスを出現させる。
「よしＯＫ。コマンドオン！ワープ・移動対象・俺と遊希。移動対象・人理継続保障機関カルデア中央管制室コフィン内・スタート！」
インパルスが光を放ち、俺と遊希を包み込んだ。
世界が白く染まって――――――――。

光が晴れると、狭いコフィンの中にいた。もちろん遊希も一緒だ。
『――う、外に、は』
『……なんとかなるよ』
コフィン越しに会話が聞こえてきた。どうやら丁度いいタイミングで戻ってこれたようだ。
『コフィン内マスターのバイタル　基準値に　達していません。レイシフト　定員に　達していません。該当マスターを検索中……発見しました。適応番号３８　舞寺理来　適応番号４８　藤丸立香　をマスターとして　再設定　します』
アナウンスが流れてきたのでもうすぐに冬木へとレイシフトするのだろう。握った手に力が入った。
『アンサモンプログラム　スタート。霊子変換を開始　します。レイシフト開始まで　あと３　２　１　全行程　完了（クリア）。ファーストオーダー　実証を　開始　します』
さあ、冒険の始まりと行こうか！

乗り物作りとチームカルデア

レイシフトが終わると燃え盛る町のビルの屋上に俺達はいた。熱気が強くて立っているだけで汗が吹き出そうだ。
「おおっ！これがふゆきなのか！……ずいぶんともえているが、これがとかいなのか？」「んなわけねえだろ遊希、お前は元気そうだな……こんな暑いのに」
「ああ、わたしはこおりぞくせいだからな！」
胸張って言うな、目立つだろ。しかし、氷属性ってだけで熱気を感じなくなるもんか？何かあるのではないかと思ってジッと遊希を見ていると、ひらひらと白い何かが遊希の周りに漂っていることに気づいた。
「ん？こりゃなんだ？」
手に取ると、ひんやりと冷たく、手の体温で溶けてしまった。それは間違いなく『雪』だった。
「氷属性ってそういうことかよ!?」
氷属性だから涼しいのではなく、氷属性により雪が発生しているとしたらそれは涼しいだろう、羨ましい。
「ご主人（ますたー）、これからどうするのだ？」
「骨を蹴散らしながら大空洞に行く、以上！何か質問がある人は挙手！」
「はい！」
「はい遊希君、何かな？」
「だいくうどうとやらまであるいていくのか？」
「甘いな遊希、文明人は乗り物を使うのだ！」
「のりもの！なんだかワクワクするひびきだな！」
「おう！飛びっきりのやつを用意してやろう！」
本当は普通に戦車で行くつもりだったのだが、遊希がとてもキラキラした目でこっちを見てくるのでついやっちゃったんだ。だからぐだ子、マシュ、所長、ロマニ、許せ。
☆乗り物制作中＆序盤割愛☆

理来&遊希が乗り物を作っている同時間帯。
『現在、生き残ったカルデアの正規スタッフはボクを入れて二十人に満たない。ボクが作戦指揮を任されているのは、ボクより上の階級の生存者がいないためです。レフ教授は管制室でレイシフトの指揮をとっていた。あの爆発の中心にいた以上、生存は絶望的だ』
ホログラムとして浮かびあがったロマニがオルガマリーにそう告げた。それはとても残酷な現実をオルガマリーに突きつけることになった。
「そんな――レフ、が……？いえ、それより待って、待ちなさい、待ってよね。生き残ったのが二十人に満たない？じゃあマスター適性者は？コフィンはどうなったの!?」
せめてマスターだけでも助かっていてほしい、そんな思いが込められた叫びだった。
『……４８人、ほぼ全員が危篤状態です。医療器具も足りません。何名かは助ける事が出来ても全員は……』
「ふざけないで、すぐに凍結保存に移行しなさい！蘇生方法は後回し、死なせないことが最優先よ！」
「ああ！そうか、コフィンにはその機能がありました！至急手配します！」
ロマニが映っていたホログラムが消えた。恐らくコフィンのコールドスリープを起動しに行ったのだろう。
「……驚きました。凍結保存を本人の許諾なく行う事は犯罪行為です。なのに即座に英断するとは。所長として責任を負う事より、人命を優先したのですね」
マシュは所長を感心した目で見ていた。
「バカ言わないで！死んでさえいなければ後でいくらでも弁明できるからに決まってるでしょう!?」
だが所長はそう否定した。そもそも彼女はまだ若い、故に精神もか弱いのだ。彼女の肩に伸し掛るプレッシャーは相当な物だろう。それに四十八人の魔術師＋一般人の生命を損失させたという責任が追加されれば彼女の心は容易く折れてしまうだろう。

「だいたい４８人分の命なんて――」
背負える筈がない。そう言おうとして気がついた。
「ちょっと待って、ほぼ全員？だれかマスターで他に生存者がいるの!?」
所長がホログラムが浮き出ていた場所に問いかけるが、ロマニはコールドスリープ起動作業をまだ終えていないのか、返事は帰ってこなかった。
「所長、探しに行きましょう！生き残ったマスターもここにレイシフトしている可能性があります！」
「そうだよ！もしかしたらどこかで助けを待っているかもしれないよ！」
「……そうね。一人でも戦力は確保しておきたいしね」
マシュと立香の提案に乗る所長。
（でも、そもそもレイシフトできたのかしら？コフィンは壊れてる筈なのに……）
そんな考え事は大声を上げて探していた二人を見て吹き飛んだ。
「ちょっと待って!?そんな声を上げたらさっきみたいに変なのが来るわよ!?」
「……（コクコク）」
「ほら！骸骨も頷いてるじゃないってキャー!?何よこいつー!?」
「所長!?今助けます！」
「やっちゃえマシュ！」
「はい！マシュ・キリエライト戦闘開始します！」
彼女らが理来達と出会うのはまだ先になりそうだ……。
所長を救出した後、再びロマニとの通信が繋がった。今は所長とロマニが話し合っている。
『……報告は以上です。現在、カルデアはその機能の八割を失っています。なので、こちらの判断で人材はレイシフトの修理、カルデアス、シバの現状維持に割いています。外部との通信が回復次第、補給を要請してカルデア全体の立て直し……というところですね』
「……はあ、ロマニ・アーキマン。貴方、何か忘れてない？」

『うん？もう伝えることは伝えたよ？』
「４８人のマスターは〝ほぼ〟全員が危篤状態、なのよね？」
『あっ！そうだ！一人そっちにレイシフト成功しているマスターがいるんだ！』
　一部強調して言ったことでロマニも気がついたらしい。
「それはわかっているわ。誰が生き残ったの？」
『マスター番号３８、舞寺理来だよ！』
「え〟、あの変な使い魔使い？」
　所長が少し顔をしかめた。彼の態度を思い出してみると確かに彼女にいい思いをさせるようなことはしていないので、これが妥当な対応である。
「今舞寺理来って言った!?リックがいるの!?」
『うわぁ!?どうしたの立香ちゃん!?』
「ねえ！リックがここにいるってどういうこと!?」
「先輩!?落ち着いてください！舞寺理来さんと何があったんですか!?」
　立香の突然の反応に全員が驚いた。舞寺理来の名前を聞いた途端にここまで落ち着きが無くなるとは誰も思っていなかったのだ。そもそも、藤丸立香と舞寺理来との関係だってまだわかっていないのだ。
　マシュの声掛けで少し冷静になったようで、ポツポツと話し始めた。
「リックはね、私の大事な友達なんだ」

ある日の出逢い・表

――そう、あれは確かまだ私が小学生の頃の話。当時の私はおばあちゃんの家に住んでいた。私が小さい頃に両親が交通事故で死んじゃって、行くところが無くなった私をおばあちゃんが引き取って育ててくれたんだ。ある日、友達から私の親に着いて聞かれた。意識が出来た頃にはもう事故は起きていたから、私はその質問に答えられなかった。多分それからかな、私の親は何か訳ありなんだど思われるようになった。どんな訳が有るのか誰も知らずに、私の周りから少しずつ人が離れていった。両親は死んだって、言いたくなかったんだ。皆が自分の親について話している顔が楽しそうで、嬉しそうで、そんな雰囲気を私の話で壊したくなかったから。でも友達の中にはどうしても聞きたい子もいて、その子にも私は言えなかった。それから、その友達と上手く話せなくなっちゃった。その子はクラスの人気者で、私とその子との仲が悪くなって来ている事にクラスの誰かが気づいて、いつの間にか私はクラスから孤立しかけていたんだ。どんどん人が私から離れていってしまって、それがとても怖くなってしまって、頑張って話しかけた。　だけど駄目だった。私が話している時、色んな目で見られたんだ。存在を忘れていたような目、珍しいものを見たような目、人を邪魔物にしか見ていないような冷たい目。早く視界から消えて欲しい、そんな感情の篭った目。それが嫌で、髪の毛を伸ばして目を隠した。そんな眼で見て欲しくない、前のように仲良くしたいだけなんだ。そう言えていれば良かったんだけど当時は怖くて言えなかった。それから私は虐めっ子に目をつけられた。カバンを隠されるくらいならまだいい方で、上履きに大量に画鋲が刺さってたり、机に刃物で落書きが彫られたり、お弁当をトイレにながされたりした。どうしてそんな事をするのか聞いた事がある。『暇だから』『楽しいから』『クラスの嫌われ者を成敗してやってる』『私は悪くない。虐められるあんたが悪い』皆自分勝手な理由で、正当な理由なんて何一つなかった。ある日突然、夕暮れ時の公園に連れてこられて、殴られた。沢山罵倒されて、蹴られて、私は身を縮めて自分を守る事しか

出来なかった。そんな時、声が聞こえたんだ。
「ヘイヘイヘイ、そこのレディースアンドジェントルメンズ、集団で無抵抗の女の子ボコすのってカッコ悪いと思わねーの？」
虐めっ子達はその子にも罵声を浴びせた。私の事なんて良いから逃げて欲しかった。
「そんで？そろそろ言いたいことは終わったかい？じゃあ俺も一つ言わせてもらうぞ？」
その子は全く動じていなかった。真っ直ぐな瞳で虐めっ子達を見詰めるその子の顔は、苛立ちに染まっていた。
「俺ん家の傍でワーワーギャーギャーうるせーわ！そんなに暴力大好きか？人を虐めるのたーのしー！ってタイプの頭がアレな人ですか？ああ？家に帰ってＲ１８ゲームでもやってろや！」
それで虐めっ子達は怒ってその子に向かっていった。私はそれを震えて見る事しか出来なかった。でも、その子は違った。
真っ先に殴りかかって来た力の強い子のパンチに向かって正面から拳を合わせ、そのまま殴り飛ばした。
足払いを仕掛けた子の攻撃を一メートル近く跳んで躱し、そのまま蹴りを叩き込んだ。
背後から飛んできたパンチを見ずに屈んで回避し、虐めっ子の顔に砂を投げた後にその子の足を掴んで投げ飛ばした。
暫くしたら、立っているのがその子だけになった。その子はゆっくりと私に近づいて来た。今さっきの喧嘩を見て、私はその子の事が怖くなっちゃって、後ろに下がって、足元の石につまづいて転んでしまった。怯える私に構わずその子は近寄ってきて、
「ほら、もう大丈夫だから、な？」
そう言って手を差し伸べてきた。私を怖がらせないように浮かべただろう微笑みを浮かべて。私を見るその人は夕焼けと重なって、まるで物語の主人公のように見えた。
その子の手を握った瞬間、力強く引き上げられた。思わず声が漏れて、気がついたらその子に抱き締められていた。
「怖かったろ？辛かったよな？もう心配は要らない、もう終わったん

だ」
　そう優しく呟かれ、トントンと背中を軽く叩いて私を落ち着かせようとしている。
　その子の顔は、何故かボヤけて良く見えなかった。
「ありゃ、泣かせる気は無かったんだけどな……そうだ、コレ食うかい？」
　そう言って赤い何かを私にくれた。ぼやけてたけど、リンゴだってわかった。何でリンゴだったのかはわからないけど、私は渡されたそれを一口齧って、
「え!?何でより泣くの!?リンゴ嫌いだったか!?待て待て待て待て！俺が虐めて泣かせたみたいになるから！せめて俺が離れてからにしてくれー！」
　そう言ってその子は逃げるようにどこかへ走り去っていった。別にリンゴは嫌いじゃない。ただ、そのリンゴが甘くて、優しい味わいで、何故か、ほとんど記憶にないお母さんを思い浮かべてしまった。
「――それから、その子にもう一回会いたくて町中探し回ったら、同じ学校に居たのにはお互いに驚いたよ！……ってあれ？何で泣いてるのマシュ!?」
「うう、すみません。そんな良い人が今までカルデアに居たなんて気づかなくて、私がもっと早く気づいていれば先輩と会わせてあげられたのに……」
「良いよ、この街にリックが居ることはもう分かってる。だったら、また探して会いに行くだけだよ！」
「はい！マシュ・キリエライト舞寺理来さんの捜索を開始します！」
「……完全に私放置じゃないのよ、ねえロマニ――――」
『ヒグッ、エグッ、ズズズ、チ――ン！』
「泣きすぎでしょ!?」

ある日の出逢い・裏

「よっし、もうちょいで出来るな」
「なあご主人(ますたー)！こいつはなんというのりものなのだ？」
「これはなー、ロボットって言うんだぞー」
　ロボット……、と完全に見惚れている遊希を見下ろしながらロボットの頭部の作成に取り掛かった。
「待ってろよーリッカにマシュに所長ー。これで度肝抜いてやるからなー」
　もうすぐ出来上がりそうな、物騒な特異点の雰囲気をぶち壊しそうなロボットのデザインを見たぐだ子らの顔が楽しみだ。
「ところでご主人(ますたー)、そのリッカとかいうやつとはどういうかんけいなのだ？それにどうやってしりあったのかもきになる」
「ああ、それかー。少し長くなるがいいか？」
「かまわぬ！ドーンとはなせ！」
「そんなにインパクトねえよ。そうだなー、あれは確か――」
　――俺が小学生の頃だったか。その時の俺は、まあ、調子に乗ってたな。その当時から今のような能力があったから仕方がないのかもしれないが、今にして思えば馬鹿としか言いようがない。そのまま悪堕ちしなかっただけ良い方だ。能力を使えば人間なんて蟻のように潰せてしまうのだ。何のＭＯＤも使わない普通のゾンビを数体。それだけで人類を滅ぼせてしまうだろう。武力を持った人間が戦おうとした時には何百倍にも増えている、そんな恐ろしいゾンビだが俺の能力で出せるやつでは弱い部類に入るのだ。それこそ、下から数えた方が早いくらいに。
　そんな危険な能力を持った俺だが、悪いことに使おうとは思っていなかった。むしろ、正義のヒーローのようになりたいと思っていた。まあ今からしたらイキってるだけの三流主人公だがな。ある日の事、家で能力の実験をしていると、外から聞くに絶えない戯言が響いてきた。人の価値観や存在意義を全否定するような言葉の羅列に、そしてたまに響く女の甲高い嫌な笑い声がうるさくて、気づけば家を飛び出

していた。
　声が聞こえてきたのは近所の公園だった。中心にある砂場の近くに何人かの男女がいた。もうすぐ日が暮れるというのに騒がしいヤツらだと思って見ていたら、どうやら男女達の中心に何かがいて、それを殴る蹴る＆言葉のダブル暴力で攻めているようだ。浦島太郎の亀を苛めていた子供が今の時代にいたらこうなるだろう。しかしながら何を虐めているのか、犬か猫か、そう思っていたが、甘かった。
　虐められているのは、少女だった。明るいオレンジ色の髪は泥に汚れ、服はボロボロに穴が開いている。しかし何よりもその時の俺の目を引いたのは、前髪に隠れてよく見えない少女の目が一瞬見えた時だった。目のハイライトがほぼ消えかけていたのだ。そんな絶望一歩手前の女の子を見て、俺は居てもたってもいられなかった。
「ヘイヘイヘイ、そこのレディースアンドジェントルメンズ、集団で無抵抗の女の子ボコすのってカッコ悪いと思わねーの？」
　このセリフを言った時の俺はさぞかしドヤ顔が決まっていただろう。
「あ？お前には関係ないだろ！帰れチビ！」
「お前もこいつで遊ぶか？」
「やーねーそんな目で見ないでよ、私達はただこの子と遊んでるだけよ？」
「そうよ、この子一人も友達がいないから、わ　ざ　わ　ざ　遊んであげてるのよ？」
「そんで？そろそろ言いたいことは終わったかい？じゃあ俺も一つ言わせてもらうぞ？俺ん家の傍でワーワーギャーギャーうるせーわ！そんなに暴力大好きか？人を虐めるのたーのしー！ってタイプの頭がアレな人ですか？ああ？家に帰ってＲ１８ゲームでもやってろや！」
　そう啖呵を切ると、男女らの顔が一気に赤くなった。トマトのほうが白いんじゃないかと思うくらい。
「ならお前で遊んでやるよ！」
「黙って聞いていればこのチビがあああっ！」

あ、煽りすぎた。そう思った時にはもう目の前に男の拳が迫っていた。しかし、俺の能力は肉体的な要素も持っている。マインクラフターは、数秒あれば素手で大木も岩も破壊出来るのだ。しかも数秒で何度も何度もパンチする敏捷性も持っている。そんな拳を一般ピーポー君にまともに当てようものならちょっと命が危ない。当時小学生だからと甘く見てはいけない。小さな拳がプロボクサーを上回る破壊力と速度で当たろうものなら、最悪〝貫通〟する。故に殴り合いだけは避けなければならないのだが、避けるだけでは彼ら彼女らは満足してくれないだろう。むしろより過激になりそうだ。だから、できるだけカウンターで終わらせる。

正面から来た拳に俺の小さな拳を合わせ、あえて直ぐに殴らずに一瞬力を込めることで拳の勢いを殺し、力が拮抗する直前で勢いよく俺の拳を押し込む。すると面白いように飛んでいって地面を転がり、起き上がることは無かった。後に確認するとちゃんと生きていたのでご安心を。

（んー、めんどい）

力加減をする戦いほどめんどくさいものは無い。それは戦いではなくただの作業だ。

そんな思考をしている時、別の男が俺の左手側に周ると勢いよく蹴りを繰り出した。しかしその軌道は低く、俺の足を狙っていることは明らか。足払いのつもりなのだろう。俺のジャンプ力が低ければ多分コケてたと思う。だがマインクラフターは、余裕で一メートルはジャンプするし、ポーションの力を借りれば二メートル以上跳べる。跳んで足払いを避けるとその場で回るように男に蹴りを食らわせた。マインクラフターは蹴りはそんなにしないので死にはしないだろう、ヤクザキックだったらジャンプ力の補正が乗るかもしれないが。

（決まった！こんな技決められる俺ＫＡＫＫＯＩＩＩＩＩ！！）

二人を倒した俺だったが、違和感に気づいた。

（なんか人数が足りない？）

もしや逃げたか、いや、あの怒りようではそれは無いだろう。しかしまだ何人かスタンバイしているのだから悠長に探している時間も

ない。
（だったら！）
インベントリに入れている特殊な懐中時計を取り出し、ボタンを押した。
カチリと音がした瞬間、俺以外の全てが停止した。これは【五つの難題ＭＯＤ】で追加される【咲夜の懐中時計】というアイテムであり、効果は満腹度を使用して時間を止めるというチートアイテムである。お腹が空くので長く使えないのが欠点である。
くるりと一周当たりを見回すと、俺の真後ろに女子が拳を突き出した体制で止まっていた。あとちょっと止めるのが遅かったら後頭部に直撃していただろう。本来なら普通に移動すれば避けられる攻撃なのだが、彼ら彼女らは一般人な為に不自然な動きは出来ない。そう、立っていた場所から瞬時に移動するなんて普通は有り得ないのだ。なのでめんどくさいが隠蔽工作という名の余計な動きがいるのだ。
時計発動前の場所に戻って時間停止を解除し、即座にしゃがむと一瞬前まで俺の頭があった位置に腕があった。それは完全にさっき見た女子のものだった。
（よくもめんどくさいことやらしてくれたな？）
女子にしてやられた、そんな考えが頭に浮かんだ時には俺は反撃に出ていた。
右手に砂ブロックを出現させ、それをあえてブロック化を解除する。手の中から砂が溢れ出る中、それを俺の背後に向けてぶん投げた。大量の砂を浴びた女子は白く染まり、目に砂が入ったのか目を抑えて金切り声を上げている。ここで俺は一旦冷静になった。すなわち、女子に殴る蹴るの暴行を加えるのはヒーローとして大丈夫なのか？と。だがその思考はあっという間に終わる。ああなんだ、投げればいいじゃん、という結論で。
女子の足首を掴むと、ジャイアントスイングの要領で振り回して投げた。砂場に向かって投げたので柔らかい砂がクッションになるだろう、気絶はしていたが。ちなみに、その女子はスカートを穿いてい

たが下に短パンを穿いていたので下着は見ていない。見ていないったら見ていない。

暫くして周りを見回すと、俺以外に立っているやつは居なかった。

（さ、あの子は大丈夫か？）

死にかけの目の女の子は俺を見ていた。しかしその目には怯えが浮かんでいる。

（あー……やり過ぎたな）

取り敢えず落ち着かせなければ、そう思ってできるだけ女の子を刺激しないようにゆっくりと近づくと、女の子は立ち上がってジリジリと後ろに下がりだした。が、足元にあった大きめの石に運悪くつまづき転んでしまった。尻餅を着いた少女は俺を見上げて震えている。その目には涙が零れそうな程に溜まっている。ここまで怯えられるとなんて話しかければいいのか、その時の俺は思いつかなかった。結局俺が言えたのは、

「ほら、もう大丈夫だから、な？」

ごく在り来りな言葉だった。これ以上怖がらせないように笑ってみたが、上手く笑えているのか自信が無かった。

転んだままの少女に手を差し出すと、少女は恐る恐る手を握った。

（えーっと、こういう時ってどうすりゃいいんだ!?）

当時の俺の思考をまとめると、ヒーロー気取りがヒーローっぽいことをする過程のみを考えていた結果、最終的に何をすればヒーローっぽくなるのか考えていなかった、ということだ。

わかりにくいようなら、その時の俺に泣きそうな女の子を慰める語彙力は持っていなかったと解釈してくれればいい。

だから、小難しい思考を諦めた。

少女が握ったままの手にほんの少しだけ力を込めて引き寄せ、そのまま抱きしめた。

「怖かったろ？辛かったよな？もう心配は要らない、もう終わったんだ」

（だから泣かないでくれ！マジで女の子泣かすのだけはしたくねえんだよ！）

もうヒーローっぽくとかそういう思いは無く、ただ泣き止んで欲しい、それだけを思っていた。
だがそんな思いも虚しく少女の目から涙がポロリと零れた。
「ありゃ、泣かせる気は無かったんだけどな」
(待ってこれどうすれば泣き止んでくれるんだよ)
「……そうだ、コレ食うかい?」
右手にリンゴを出現させ、少女に渡したところで気がついた。
(あ、やべ。一般人に神秘を見せちゃだめなんだよな?)
しかし少女は疑問にも思っていないのか、それとも今の状況を把握するのにいっぱいいっぱいなのか、小さな口でリンゴを齧った。
リンゴを咀嚼した瞬間に滝のように涙が溢れたのはさすがに予想していなかった。
「え!?何でより泣くの!?リンゴ嫌いだったか!?待て待て待て待て!俺が虐めて泣かせたみたいになるから!せめて俺が離れてからにしてくれー!」
この現場を誰かが見ていたりしたら、俺が複数の男女をボコボコにして少女を泣かせている光景にしか見えないだろう。即座にこの場を離れなければ!
全力疾走で後を離れたが、一部始終を目撃していた姉に言い訳する間もなくゲンコツを食らわされたことは誠に遺憾である。
まあそれで終われば良かったんだが、そうは行かなかったんだよなー。
あれは少女から逃げて三日後、学校の廊下をふらふらと歩いているときだった。
「あ!!居たあああああああっ!!」
俺の後方からそんな叫びが聞こえた。何だ何だ?と野次馬感覚で振り返った。
鮮やかなオレンジ色の髪の奥に、燃え盛っているような光を灯した少女が全力疾走で此方へ迫っていた。思わず逃げ出しても仕方がない迫力があった。
「逃げないでよおおおおおおっ!!」

「コッチ来んなあああああああああああああああああああああああぁ
あぁぁぁぁぁぁぁ――――――」
なんだなんだと他のクラスの人達が見ている中、廊下を全力疾走する二人の姿があったとさ。追われている方の叫びが虚しく廊下に響き渡った。

「――――んで、結局捕まって強引に友達にされたとさ。これで出会いの話はお終いだ……今冷静に考えると、視点変えてれば時止めなくても背後の奇襲気づけてたな…………」
「ご主人(ますたー)がにげるとは、どれほどこわいかおをしていたのだ……」
「しかもその時ポーション飲んで速度上げたのに追いつかれたんだぜ」
「よけいにリツカがわからなくなったぞ……」
頭を抱える遊希にリンゴを投げ渡し、ロボット作りの最終段階に取り掛かった。もう間もなく完成だ。
「ヤツらの驚く顔が目に浮かぶようだ……ククク、クハハ、ハハハハハハ!!」

イタズラのために鐘は鳴る

何処も彼処も燃え盛りし死の街、冬木。命亡き者達が生者を仲間にしようと彷徨い、まさに地獄のような街に、大きな影があった。その影が彷徨く異形の近くを通ると破裂音と共に異形の頭部が砕け散った。数多の異形を塵と化しながら影が歩みを止めることはなく、それは正に世界の終末に現れる恐怖の大王のような、そんな絶望の光景だった。しかしそれは、生物ではなく人工物である。影の頭部、眉間のあたりにこれを作り上げた者がいた。燃え盛る街と砕け散る異形をまるで道端の蝿をみるような目で見下すその男は……。

まあ☆俺なんですけどねー！

「遊希、しっかり周りを見ろよ。骨は容赦なく撃て」

「……」

「って、ハマり過ぎじゃね？」

今現在、完成したロボットに乗り洞窟を目指すついでに素材集めをしている。

教室くらいのスペースの操縦室、そこに俺達二人はいた。

俺はコックピットに座ってロボットの操縦に専念し、遊希はロボットに取り付けた銃を使って無言で撃ちまくっている。さっきから見ているが全く銃声が途切れず、しかも撃った所を見ると骨さんが一撃で頭を砕かれている。恐ろしい精度のスナイプ力、俺でなきゃ見逃しちゃうね。しかも素材がとても沢山集まってウハウハ状態で内心踊りたい気分だ。

まあ何だかんだでのんびりと進んでいます。

『やっと繋がった！そっちは大丈夫かい!?』

突如として目の前にホログラムのロマニが浮かぶまでは。

「キェアアアアアアアアアアアアってロマニかい！運転中に出てくんなよ!?前見えないだろ！」

『え!?ああごめん！って今運転しているのかい!?君免許持ってるの!?』

「バチコリドライブ中だよ！あとこれに免許証は無い！」

『え？車じゃないのかい？』
　今俺が握っているのはハンドルではなく二本の細い棒の先端に手のひらに収まるサイズの球体が刺さっているような形状の操縦桿である。
「持ってるの明らかにハンドルじゃねーだろ！……まあ、よーく耳を澄ましてみな？モニター越しでも聞こえる筈だぜ？」
　ロマニは素直に耳を澄ました。すると、ズズン……ズズン……と重い音が聞こえた。まるで巨大な怪獣か何かが歩いているような音だ。
『君何を運転しているんだ!?』
「まあまあ、それはそのうちわかる。そんなことより、俺の他にもレイシフトしたやつは居るのか？」
『え？ああ、マシュとマリーと立香ちゃんがレイシフトしているよ！あと現地のサーヴァントと協力関係になったよ！』
　どうやらもうキャスニキは仲間になっているようだな。もうすぐ合流出来そうだ。
「ＯＫ。目的地は決まっているか？」
『うん、洞窟に向かうみたいだよ』
「なるほど、所でロマニ」
『なんだい？』
「……別に、先についてしまっても構わんのだろう？」
『あはは……危険な運転はしないでね？』
　俺の笑みを見て何故か苦笑するロマニであった。その後、お互いに状況を伝えあった（こちらは正しいことを伝えているとは言ってない。遊希が一緒に居ることとか）。
「え？所長爆発したのに生きてたの？ゴキブリか何か？」
『やっぱりそうなるよねー。何で助かったのか不思議なくらいだよ。奇跡か魔法でも起きたんじゃないかな？』
「僕と契約して魔法少女になってよ！今なら税抜き三百万円と魂一個！ローンでも良いよ！（裏声）」
『もっと嫌だー!?ていうか君もアニメ見るんだね!?』
「カンのいいロマニは嫌いだよ」

『理不尽じゃないかい!?』
「そろそろ到着するから通信切るぞー」
　意外と話してて楽しかったが所長救出計画を練るためにはロマニはいてもらっては困るのだ。ロマニよ、サラダバー！
『えっ!?ちょっと待――』
「コマンドオン、設定・再起動。対象設定・人理継続保証機関カルデア通信システム」
　コマンドブロックに魔力を送ると効果は即座に発動した。ホログラムのロマニに砂嵐が混ざり、プツッ、と音を立てて消えた。
「……よし切れたな。遊希ー？そろそろ着くぞー。もう撃つの止めろー」
「え、もうおわりなのかー？もっとうちたいぞー？」
「黙らっしゃいトリガーハッピーポンコツダメイドラゴン」
「ながいぞ!?」
　長くしましたから。……ただ待ってるのもつまらねえな、よしやるか。
「ちょっとそこのチェストの中からマイクとスピーカー取ってくれ」
「む？なにをするのだ？」
「いや、ちょっとふざけてみようかなと思ってな」
　それは立香達が洞窟へ向かっている時の事だった。
『ピ～ンポ～ンパ～ンポ～ン☆迷子のおしらせです。藤丸・立香ちゃん。マシュ・キリエライトちゃん。おるがまりぃ・あにむすふぃあちゃん。お友達がお待ちです。1階大洞窟前へお越しください』
　と、迷子のアナウンスが流れてきた。
「「迷子扱い!?」ですか!?」
「なんで私だけやる気ないのよ!?」
　この燃える街に迷子のアナウンスが響いてきたことがもう既におかしいのに女性陣のツッコミでキャスター・クーフーリンの腹筋がご臨終になったことは言うまでもない。
「この声は間違いなくリックだね……良かった、元気そうで」
「先輩、良かったですね……」

涙を零した立香にマシュがそっとハンカチを差し出した。マシュの頬も涙に濡れていた。
「何であれで泣けるのよ!?」
全くである。
「よーし！待っててよリックー!!今行くよー！」
「先輩!?待ってくださあああああい！」
「また置いていかれるの!?」
急に駆け出した立香を追いかけるマシュらであった。
「先輩ちょっと止まってくださああい！」
何故デミ・サーヴァントと化したマシュが徐々に距離を離されていくのかは謎である。
「……よし、これで洞窟まで来るだろ。多分」
「つぎはなにをするのだ？」
その質問を待ってた！
「くくく、思い切りカオスを演出してやるのさ」
「ご主人（ますたー）がいやらしいえみをうかべている……!?」
「よーし喧嘩なら買うぞー？ダイヤモンド積んででも買うぞー？」
「ヒッ」
この後遊希がどうなったかは、理来が握っているエンチャントピコピコハンマーさんだけが知っている。
「安心してください！ノックバックしか付いてませんよ！」
「れ、レベルは？」
「II（最大）」
「ヒッ」

ポップコーンマシンのハンドルっていくら回しても量は増えないよ

燃え盛る冬木をマシュ達は群がる怪物を蹴散らしながら駆けていた。しかしよく見ればその中に一人足りないことに気づくだろう。

「先輩待ってくださいよぅ……」

ただでさえ戦闘で疲れているマシュはもう大声を出す体力は残っていなかった。それもそのはず、先程駆け出した立香を今も追いかけているのだから。どういう訳か立香は怪物の間をするすると抜けて走り去っているのだ。正しくは怪物の間合いに入り、気付かれて攻撃を仕掛けられた時にはもう間合いから出て走り去っているだけなのだか、何故一般人があんなに早いのか謎である。逸般人とでも呼んだ方があっている気がしてならない。

ありゃあそこらの戦士より早えなとクーフーリンがボソッと呟くくらいだ。

そうしてどれほど走っただろうか、ようやく立香が立ち止まった。

「先、輩、やっと、追いつき、ました……」

「あんたねぇ、周りと、ペースを、合わせなさいよ……」

クーフーリン以外の面々は肩で息をしている。戦闘よりも疲れているのでは無いのだろうか？

「一人で走って行かないでください！心配したんですからね！」

「……」

「先輩？どうしたんですか？」

マシュの呼びかけにも立香は応じなかった。ただボーッと何かを見つめているので正直少し間抜けに見える。

一同が立香の視線を辿ると。

「「「……」」」

なんかあった。

洞窟の前で仁王立ちしている、あれは何なのだろう？二足歩行の猫のようにも見えるが十メートル以上ある物を猫とは言わないしそれ

以前に二足歩行の猫がいるかも怪しい。それに明らかに金属質な体は生物の気配は一切なく、作り物でしか無かった。
「全員集まったようだな？それじゃ――」
ソレから聞こえてきたのは男性の声だった。
パチン、と乾いた音が不自然なくらい響き渡った。
「――ミューズィック、スタアアーットッ！」
そう言い切ると同時にソレが動いた。
腰を少し屈めて、片腕を円を描くように回し、ソレ自身も回り出した。見る人が見れば『あれチューチュート○インじゃね？』と思う踊りをソレは踊り出したのだ。だがそれだけではソレの活動は終わら無かった。
『ハロー、○ティ！こんにちは「「出来たてのポップコーンはいかがー？」」キ○ィはみんなのにんきもの「「出来たてのポップコーンはいかがー？」」わんぱくいじわる、おこりんぼうもー、やさしいキテ。と、いっしょならー！つられてやさしくなっちゃうな～「「アィッ!!」」』
と、子供向けな明るい音楽が不気味なくらいに響き渡った。
「超合金ハ○ーキティ……」
立香がボソッと呟いたが、最早異世界と言っても過言ではない謎の雰囲気に飲まれ誰も聞いていなかった。
『そろそろみんな合流できた？ってなんだあれー!?』
ロマニの叫びも虚しくコダマして、場の空気は完全になんかヤバいやつに支配されたのだった。
☆カルデア一行休憩中☆
「すまんかった」
あの後所長からこんな状況でふざけ過ぎだと怒られた俺は現在土下座をさせている。……超合金波浪キティに。俺？もちろん操縦席で寛いでますが何か？
「アンタまだ巫山戯てるの!?」
「所長！もう落ち着いて下さい!?」
「まだよ！こいつに一発ガンドを撃ち込まないと私の怒りが収まらないわ！」

「所長落ち着いてくださあああい!?」
おーおー所長が怖いねー。まだ乗ったままでよかったわー。もう降りないわーおほほほほほー。
「感じるっ!あいつ中で笑ってる!!」
「所長いい加減に落ち着いてください!?」
なぜバレたし。……まあそろそろ降りないと話が進まないか。これ乗ったまま洞窟行けそうもないしな。
「遊希ー、先に降りて話し合っててくれー」
「うむ!わたしにまかせろ!」
内部に設置したハシゴをするすると滑るように降りて行く遊希であった。
俺が降りたら確実になんかやられるからな。遊希を先に下ろすことで『え?なんでメイド?アイエエエ!?メイドナンデ!?』状態を作りこの事を有耶無耶にするのだ。俺の作戦はもう完遂したも同然よ。
「ふふふ、ははは、ふはははははははははゲッホゲホヴェッ」
高笑いしすぎて喉痛ぇ……。
むせた時に脱げたフードを被り直しつつ外の様子を観察する俺なのだった。

猫型ロボットの真下で、オルガマリーは舞寺理来か出てくるのを待ち伏せていた。
「私を怒らせるとどうなるか解らせてやるわ……」
完全に堪忍袋の緒が切れていた。
「リック大丈夫かなあれ……」
「先輩、先にお祈りしましょう」
「そうだね、助かるように――」
「ご冥福を」
「死んでないよ!?」
後ろで立香とマシュが夫婦漫才みたいな事をやっているときだった。
カタン、カタンと硬質な何かを踏む音がした。

「やっと降りて来たわね……ふふ」
　左の手のひらに右の拳を打ち付ける。
「不味いですよ先輩、理来さんに所長パンチが炸裂しちゃいますよ……」
「魔術（物理）怖い……」
　女子２人が震えている中、超合金ハロー規定の足元から自動ドアのような音がした。
　そして降りてきた人物を見てカルデア一行は驚愕することになった（ロマニ以外）。
「「何でメイド!?」さんが!?」いるんですか!?」
　見事に重なりつつもちゃんと誰が誰かわかるという偶然がおきた。
ちなみに所長、立香、マシュの順で喋っている。
『あれ？この間舞寺君の所にいた……』
「む？……ああ、はくいチキンか」
『白衣チキン!?』
「いやまておもいだす……たしか、ローマだったか？すまぬローマ。なをまちがえた」
『それも違うよ!?僕自己紹介したよね!?』
「……
いや、されてないぞ」
『え、』
「ドクター、せめて自己紹介はしておいた方がよろしいかと……」
　マシュの視線が痛く感じるのは何故だろう、とロマニは心の中で思った。
「うちのドクターが失礼しました。私の名前はマシュ・キリエライトです。それと――」
「改めまして、ドクターことロマニ・アーキマンだよ。皆からはよくドクターロマンって呼ばれるよ」
「人理継続保証機関カルデアの所長、オルガマリー・アニムスフィアよ」
「私は藤丸立香！得意科目は体育！好きな物は美味しい食べ物！好き

な言葉はネバーギブアップ！よろしくねっ！」
「キャスターのクラスで現界してる、クー・フーリンだ。よろしくな嬢ちゃん」
「マシュマロにローマにイルカにふじさんにキャスターだな！おぼえたぞ！」
「『「「違う！」」」』」
「む？」
あれ？何か間違えたかな？と首を傾げる遊希なのでした。

数分後。
そろそろ降りても大丈夫な頃かね？ハシゴを降りてドアを開けると、カルデア一行＋遊希がなんか楽しそうに話してた。なんか思ってたのと違うがまあいいか。やっぱ平和が一番だ。
「おーいお前らー。そんな所でわちゃわちゃしてないで行くぞー」
わー凄い女子会見たいな空気になってるー。
「あ！居た！リックウウウウウウウウウ!!」
俺に気づいたぐだ子が俺に駆け寄り、
「会いたかったよおおおおお！」
勢いを一切殺さずにダイブしてきた。
「いやちょ待っ――」
さすがに俺でも背後の逃げ道が絶たれている上にポーションも飲んでいなかった故、避けられる訳もなく。
哀れ、地面と後頭部がキスを交わす羽目になった。
体力ちょっと減った。
「モッガガンガ、モゴゴグゴガグイモモイ（立香さんや、降りてくれ暑い重い）」
現在の状態を説明しよう！下から順に地面・俺・ぐだ子のサンドイッチ！以上！ていうかこれ俺どこに潰されてるんだ？やけに柔らかいんだけども。
「え？何て言ったの？」
「モガゲガモッゲイムガマギモエメエンガモーガ！モゴモ！（お前が

乗っているから聞こえねえんだろーが！降りろ！）」
　頭だろう位置をべしべし叩くと、痛い痛いと言いながら上からぐだ子が降りた。
「あー窒息するかと思った」
『……立香ちゃん、意外と着痩せするタイプなんだね』
　ロマニよ、何を見てそう思った。
「全くもー。リックったら！カルデアに居るんならいるって言ってよ！冬木に来てから探し回ったんだからね！」
　腰に手を当てて頬を膨らませて『私、怒ってます！』と言いたげな様子。
「へいへい居ますよ此処に」
「今言われても……」
「黙らっしゃい大型犬少女藤丸立香」
「あだ名が斬新すぎる!?」
「ほれリンゴやるから少し静かにしてな」
「わあい」
　ぐだ子はとんでもないチョロインだったよ……。
「んで、そっちの面々は……二人知らねえのがいるな」
　所長とマシュ、クーフーリンの方を見てそう言った。
　別に知らない訳では無いがマシュにはあった事が無いので一方的に知っている訳もなく、クーフーリンに至ってはそもそも知っていていい訳が無い。なので知らないフリをするのだ。
「あ！自己紹介が遅れました！マシュ・キリエライトです！よろしくお願いします」
「クー・フーリンだ。キャスターのクラスで――」
「おう！よろしくなマシュマロ！」
「違います！ていうかまたですか!?」
「俺は無視か？」
「いや？ちゃんと聞いてるぞ？クランのワンコさんだろ？」
「違ぇよ！全然話聞いてねえだろう!?」
「うん！もちろんさ☆」

０円スマイルもお付けします。あ、笑顔のまま青筋が浮いた。怖いわこのワン公。
「私の事は覚えているかしら？」
「おー所長来てたんですかーてっきり蹲って『助けてレフ、１人は怖いのよ！もうやだおうち帰りゅ！（裏声）』とか言ってるかなと……あー、その構えた右手は何でせうか？」
「ガンドォ！」
「うおあああああっ!?」
　危ねっ!?盾出さなかったら当たってた！
「チッ」
「所長今の舌打ちですよねー？舌打ちしましたよねー？所長として行動が相応しくないと思いませんかー？かー？」
「アンタの頭の中割って見てやるわよ!?」
「おー怖い怖い。……まあお遊びはここまでにして――」
　改めてカルデア一行に向き直る。
「――また会えて良かった」
　これは紛れもない俺の本心だ。無事でいてくれてありがとう、皆。

濡れ衣装備の弓兵

洞窟前にインベントリから取り出したブルーシートを敷き、作戦会議が始まった。
「ほんで、この洞窟の中に聖杯っチューもんがある訳でんな？」
「何故関西弁なのですか？」
「ナイスツッコミだ、マシュマロボディ」
「何か凄い失礼な事を言われているような……」
「失礼な、褒めたんだぞ？」
そうなのですね、と納得するチョロいマシュなのだった。おいぐだ子＆所長、そのジト目をやめい。
「なるほど、ならわたしもマシュマロボディなのだな」
「はいはい遊希ちゃんは寝てましょうね話が進まないから」
「げせぬ……」
しょんぼりとしてブルーシートに寝転がり、直ぐに寝息が立って……いや寝るんかい。
「おいこのままだとマジで話が進まねえぞ」
「ナイスアシストキャスニキ。続きよろ」
へいへい、わざわざ見えるようにため息付かなくていいんだぞ？あれか？俺に呆れてるんか？喧嘩なら買うぞ？いくらだ？
「大聖杯……まあ、何でも願いを叶えてくれる願望器だな。それがこの洞窟の奥にあるって話だ。あとは――」
「私達はそれを回収すればいいんだって！」
おいぐだ子割り込むなよ。コミュ力下がってないかお前。キャスニキを見ろよ、あの微妙そうな顔を！皆見てやれよ、キャスニキのあの何か言いたかったけれども何か言う気無くしたみたいな顔をおおおおっ！という感じに話してみたら全員がキャスニキの顔面をまじまじと見ながら話を聞くことになった。正座で。
「あー、あの洞窟の奥にはセイバーが居てな……そいつが大聖杯を護ってる」
わーキャスニキ凄い話ずらそう（他人事）。美少女ら（＋α）にまじ

まじと顔見られたらそうなるよねー何か失敗出来ないよねーもし噛んじゃったら恥ずいもんねー分かるよキャスニキー俺は応援してるよー。

暖かい目でキャスニキを見つめてみるのだった。

何だかんだでキャスニキは噛まなかった。そんで説明会も無事に終わり、原作よりも早く闇堕ちセイバーの真名と闇堕ちアーチャーの存在も知った。美少女ズの（まだ何かあるんでしょ？）という無言の催促に耐えられなかったのでしょう、アーメンラーメン担担麺。

「理来さん、行きますよ？」

お、マシュに呼ばれた。好感度上げてないからさん付けである。いつかは先輩と呼ばれたいものである。そう思うでしょ、そう貴方、どこかに居るマシュ教の貴方！貴方ですよ貴方ッ!!

「おう、悪いがちょっと忘れ物がハロー子猫の中にあるんだ、取ってきて良いか？」

指を指しながらそう伝えたが、何故か引きつった笑みで返事された。

遊希にも声をかけ、……もう言い直すのもめんどくさいので以後白猫ロボで通す。白猫ロボに近づき、ハシゴを登る。

操縦席に腰をかけ体重を預けるとだいぶ楽になる。

「さて、ではさっさと作戦会議を初めるぞ～」

「お～！」

さあ、所長救出＆第二次混沌製造計画、は～じま～るよ～☆

この特異点のラスボスが迫っているからか、俺以外の全員が戦士の顔になっている。非常にふざけたいでござる。しかしやり過ぎても慣れという物が産まれてしまうのである。それだけは避けたいので何もしません。まる。

そんな訳で洞窟の中を比較的真面目に進んでいる俺たちなのだ。

「ねえ、リック」

「何故小声なのだね立香君や」

「……あの子、結局誰なの？」

「え、あの女子会みたいな空気で自己紹介もしてねえの？」
「違うよ!?ちゃんとしたよ！なんか上手い具合にはぐらかされるんだよ！」
「……ああ、なるほど？」
　ロボに乗っている時に出来るだけ自分の事は話すなと伝えていたが、そう来たか。
「何がなるほどなの？」
「いや何でもない。彼女は遊希、俺の護衛兼メイドさんだ」
「え、護衛ってことは戦えるの？」
「かーなーり強いぞー」
　ＦＰＳとか鬼強いと思うぞ、ヘッドショット的な意味で。
　ぶっちゃけ遊希が戦うとなると少しドラゴン要素が出ると思ってる。ドラゴンメイドは元々羽根と尾を出しっぱなしにしているのが普通なのだ。それが無い遊希の方が異常ということである。なので戦闘中に爪が伸びたり羽根が生えたり、そんな事になったら実はメイドさんはドラゴンでしたードッキリが出来なくなるので、後で武器でも持たせておこう。……そうだな、オルレアンでドッキリしようかな。ファヴニールにぶつけて怪獣決戦とかやりたいし。
「ねえ遊希ちゃんってどれ位強いの？」
　あ、やべ遊希が何答えるかわかったもんじゃない。変な事言うなよ、とアイコンタクトを送るとまかせろ、と返してきた
「わたしはそのきになればこのどうくつごとこおらせることができるぞ！なにせわたしはメイドにしてこおりぞくせいのエンｄ」
　余計なことを話しそうな口を手で摘む。口封じ（物理）ということです。
「そう言えばキャスターさーん！この奥にはどんな敵がいるんですかねー!!」
「それさっき言ったじゃねえか!?」
　すまぬ、キャスニキ。咄嗟に思いついたのがこれしかなかったのだ、許せ。
「理来さん、アーサー王ですアーサー王」

マシュがこちらに寄ってくる。わざわざ教えてくれる辺りいい子である。これがホムンクルスだとは、この性格の良さを人間にも見習って欲しいものである。ホムンクルス……そう言えば俺の母も……いや、やめとこう。思い出すだけで口から砂糖が出そうだ。
「理来さん、悪いですけど大丈夫ですか？」
不味い、今寄らないでくれ。親のこと思い出して顔引きつってるだけだから……あ、アーチャー発見。丁度いいや、濡れ衣着せたろ！
「ああごめん、あそこの人がエロい目で俺を見てるのが気になっちゃって」
その言葉を聞いた何人かが俺が指さした方を見た。
「アーチャー、お前そっち側だったのか……」
「誤解にも程があるだろう!?」
キャスニキがドン引きしながら呟いたらそれに釣られてのこのこ出てきたバカアーチャーがいるらしいぞ。
「そんな事言いつつエロい目で見てたでしょ！この変人！（裏声）」
「お前には言われたくない！おい！こいつ以外にまともな奴は居ないのか!?」
クール系なアーチャーが一人で焦っております。
「大丈夫だよ、周りを見てみな？……もうお前のことを変態だと思ってないやつ居ないから」
「そんな訳が――」
周りを見渡して、アーチャーが石のように固まった。
よく分かってない遊希以外の面々が白い目でアーチャーを見ていた事に気がついたのだろう。
「何でさあああああああああああああ!!」
アーチャーの絶叫は洞窟によく響いたとさ。まる。

やめて！ダイヤ剣で斬られたら戦争ですり減ったエミヤの精神まで斬られちゃう！お願い死なないでエミヤ！あんたがここで倒れたら桜やセイバーとの約束はどうなるの？　ライフはまだ残ってるんだから！次回エミヤ死す

暗い。その言葉は色んな時に使える。部屋が暗いとか、雰囲気が暗いとか、顔が暗いとかが当てはまる。

そしてそれら全てが当てはまった状況が今である。

洞窟の中であるが故に物理的に暗く、先程の出来事の後で尚且つ敵同士でお互いに黙っているからどんよりと暗い雰囲気が漂い、必死の弁解をした方もされた方も話題の内容が内容だからか顔に影がかかってとても暗い。今洞窟の中で暗くないのはぐだ子と遊希と俺くらいだろう。

「「「……」」」

「ご主人（マスター）、なぜあやつらはどんよりとしてるのだ？」

「俺のせいだと思うよ？」

「おぬしだったのか」

「ＹＥＳＹＥＳＹＥＳ！」

「あのー、皆一旦さっきの事忘れない？」

お、ぐだ子が会話を切り出した。さすがコミュ力ＥＸだな。

「そ、そうですね。先輩の言う通りです！このままでは話が進みません！アーチャーさん先程はすみませんでした。なのでここを通してください！」

「話が繋がってないようだが、それを許すと思うのかい？」

マシュが会話を切り込み、アーチャーがゆっくりと剣を構え戦闘態勢に入る。

「ねえアーチャー？私達はどうしても戦わないと駄目なのかな？」

「当然だ、貴様等を通せば彼女を倒そうとするだろう？」

立香がアーチャーに問いかけるがアーチャーは聞く耳を持たない。王を傷つけんとするものたちを守護者が通す訳が無い。
「行くぞ、カルデアの者達よ。私を倒せぬ様ならば彼女には届かないぞッ！」
その言葉を合図に、戦闘の火蓋が切られた。
弾丸の様な勢いで疾走するアーチャーが最初に狙ったのは、戦闘力の少ない二人のマスター。橙色の髪の少女は盾持ちの少女に守られている為、フードを被ったマスターに狙いを定めた。
（奴だけは必ず殺すっ！）
やはりホモ疑惑を掛けられたことがショックだったのか、フードのマスター――舞寺理来――を見る目が殺意に溢れている。
アーチャーの握る双剣の刃が舞寺理来の首に迫り、
キィンッ！と硬質な音がした。
「アーチャーよ、俺を殺ろうとしたのが間違いだったなあ？」
双剣を受け止めているのは、洞窟に入ってきた僅かな光を乱反射して輝く透明な剣。不思議な青紫色の光を放つそれの切っ先をアーチャーに向けて。
「俺はお前に勝てる」
俺は勝利宣言をした。
「抜かせっ！」
再度アーチャーが切りかかる。狙いは一撃必殺が可能な眉間。
だが。
ガゴンッ！と突如目の前に現れた何かに防がれた。
突如現れたそれ――木製の盾――に隠れながらニヤリと笑った。
「コマンドオン。ゲームモード・サバイバル」
ポケットの中のコマンドブロックに触れてそう呟いた、しかし何も変化は起こらなかった。
「何をしたかったのか知らないが、どうやら不発のようだな」
「いんや？ちゃーんと成功してるぜ？」
不発に見えるのも当然、このコマンドは派手な演出も何も無い。ただ、俺の体の性質が変わるだけなのだから

不敵な笑みを浮かべながら理来はインベントリから装備を取り出した。
一瞬にして理来の体を淡い紫色の光を放つ結晶質の鎧――ダイヤモンド（エンチャント済み）が覆う。
誰かが驚いた声を上げたが些細なことだ。マイクラではエンチャントダイヤモンドフル装備は常識であるからだ。むしろこれでも一撃必殺する敵がＭｏｄにはいるのだ。
「今度はこっちの番だ！」
アーチャーに切りかかるも、振り下ろした剣を後ろに跳んで避けられた。
淡く光る剣はどんな能力があるかわからない。ここは回避して様子を見るべきだ、とか思考たんだろうな。
だが無意味だ。
「何っ!?」
普通の剣であれば確実に当たらないはずの距離、しかしアーチャーの腕には深い切り傷が出来ている。
「マインクラフターの間合いを甘く見すぎなんだよ！」
追撃しようとしたが、いきなり現れた剣を俺に投擲してきた。
「マシュ！リックの援護をお願い！」
「はいっ！ハアアアアアッ！」
その剣をマシュは身に余る大きな盾で防いだ。
「遅いわ！だがよくやったマシュマロ！」
「マシュ・キリエライトです！ヤアッ！」
大盾を振り下ろしアーチャーにぶつけようとするもするりと避けられてしまった。
……よし、今のうちに透明化しよう。奇襲しかけたる。マシュの大盾に隠れるようにして予めインベントリに入れて置いたポーションを呑む。……パインサイダー美味いな。
「嬢ちゃんしっかり守れよ！喰らいなぁ！」
マシュの追撃をアーチャーが避けて姿勢が崩れた所にキャスターが火炎を勢いよく飛ばした。

「まったく、面倒な奴だ」
アーチャーは苦言を漏らしながらも冷静に状況を確認する。盾持ちの少女は戦闘経験が未熟、キャスターは的確に火球を飛ばしてくるが槍が無いためスキをついて斬れば良い。そしてあの、恐らくダイヤモンド製であろう叩けば割れる物で鎧を作る愚かな男は……。
「あの巫山戯た男は何処に行った？」
いつの間にかダイヤモンドフル装備が消えていた。
（あれ程目立つような奴が隠れられる場所など無い筈、なら何処にいる？）
洞窟は視界が悪いが、紫色に光るダイヤモンドフル装備男を見失う程では無い。
そう、見えていれば確実に目立つ。
（アーチャーくんよ、背後には気をつけな）
そう耳元で囁きたいのを我慢して、決して声には出さずに、透明化ポーションを飲み干し透明になった理来がアーチャーの背後にゆっくりと迫っていた。このまま行けば気づかれること無く倒せるだろう。
ジャリッ、と足元で音がした。
（やべ、石踏んだっ!?）
「そこかっ！」
アーチャーが振り向き様に剣を突き出した。それは見えない筈の理来の首に正確に届き――。
ザシュッ、と肉を斬る音がした。
アーチャーは一人仕留めた事を確信した。剣が骨を貫いた感覚がしている。引き抜くと、ドサリ、と何かが倒れる音がした。
「さて、一人減った訳だがまだ続けるかい？カルデアのマスターよ」
盾持ちの少女の背に護られた橙色の髪の少女は呆然としていた。彼女も音を聞いたのだろう……もう、あの男の生存は絶望的だろう。確実に首を切り落とした、そう言った確信がアーチャー――エミヤの中にあった。どうやって透明になったのかは知らないが、鎧に護られていなかった首を斬られて死ぬとは笑い話にもなりはしないだろう。

「野郎っ……！」
ギリリッ、とキャスター――クー・フーリンが歯を強く噛み締めた。
その目は人を容易く殺せそうなほどの濃厚な殺意に満ちていた。
「ふむ、どうやらこれで終わりのようだな」
「まだだよ」
「む？」
橙色の髪のマスターが前に一歩踏み出した。
「まだ、私たちがいる」
その瞳に闘志を燃やして。
「まだ、私たちは、戦える」
その瞳に輝く雫を溜めて。
「私たちは、絶対に貴方を倒す……お願い、マシュ、キャスターさん！力を貸して！」
その時、少女はマスターとして覚醒した。

前回のタイトルを回収出来なかった事をお詫び致しましてここで謝罪致します。すまんかった。

まさか自分が石を踏んで音を立てるドジをするとは思っていなかった。そして見えない筈の俺の首を正確に貫かれるとはもっと思っていなかった。

首の中を冷たく冷えた剣が通り、首裏から飛び出ている感覚がする。

（あ、これは殺られ――――）

剣が引き抜かれ、視界に映るＨＰがハート１個分減っているのが見えた。

（――――て無い！）

生きている安堵から力が抜け、ドサリ、と尻餅をついた。首を触ると何ともなかった。ＨＰも既に回復して全開だった。ちょっとだけ小腹が空いたが後で適当なものを食べれば良いだろう。

（あ～ぶっね～なもう！）

マイクラ世界で攻撃された事はあるが、首を貫かれるといった殺意てんこ盛り攻撃は受けたことがないのだ。正直死んだかと思ったのだが、マイクラボディは首を斬られた程度じゃ死なないらしい。即死するかと焦ったが良かった。

落ち着く意味も込めて、生存がバレないように静かに息を吐き出した。

（……よし、もうエミヤ仕留める準備やってしまおう）

俺はもう十分に戦いごっこを楽しんだ。死にかけるかと思ったがそれはそれだ。本気で倒す気もないしな。と言うよりゾンビやらスケルトンやら姉やらによく殺られてるのだ、今更死にかけた所で気にしないしどうせポーションで治る。……姉よ、連続ダイナマイト投擲はさすがに反則だろ。

座ったまま右手にアイテムを出現させる。それは深緑色の宝玉、エンダーパール。投げると落下地点にプレイヤーをワープさせてくれ

る便利アイテムだ。
（そーれ行ってこーい）
マシュ等の後方にいる所長等の上を飛び越すようにぶん投げる。
目の前にあったエミヤの背中が無くなり、誰もいない洞窟の通路が視界に広がった。ワープは成功したようだ。
（さて、行くかね）
「私たちは、絶対に貴方を倒す……お願い、マシュ、キャスターさん！力を貸して！」
外に向けて歩きだそうとした時、ぐだ子の声が聞こえた。それは普通の少女藤丸立香の声ではなく、決意に満ちた一人のマスター藤丸立香の声だった。
（あれ？何かぐだ子さん覚醒してね？）
振り返って様子を見ようにも背中しか見えない。無理をして見るほどでも無いだろう。まだ透明化ポーションの効果が続いているとはいえ、触られればバレるのだ。
足音を立てないように何度かエンターパールを投げてワープ移動して、洞窟の外に出た。視界に映る透明化のタグも消えたことからもうポーションの効果は切れたようだ。
「わー、何回見てもこの場にそぐわないデザイン」
視線の先に有るのは白猫ロボ（土下座状態）。これを改装してエミヤを仕留める気でいるのだ。
白猫ロボを創ったのは【ｊｏｉｎｔｂｌｏｃｋ】というＭｏｄで追加されるブロックだ。このｊｏｉｎｔｂｌｏｃｋはロボットだけではなく車やバイクなどの乗り物も作れる。そして今白猫ロボは土下座状態で洞窟の入口に丁度入れるようになっている。……ここで俺が何をするかわかった人はリクルンポイントを一点あげよう。
「あっちの戦いが終わる前に仕上げますかねー」
☆改装中☆
「全く、我が建築の才能は留まる所を知らないぜ」
まあ、ちょっと各所に組み込んだパーツの設定を弄るだけなのだが。

「よーし、んじゃ早速……いや、ダメじゃん？」
良く考えればあっちはまだ戦闘中だろう、多分、きっと、そんな気がする。そんな中に何も伝えずに作動させた所で敵諸共巻き添えにしてしまう。かといって伝えてから戻るのではダメだ。事前に脅かすよと言ってからやる様なドッキリに意味は無い。それにこの白猫ロボは遠距離から操作できないのだから、乗り込む人がいる。
「遊希を置いてきたのが痛いな……うむ、あれで行くかね」
会話可能で、人型で、白猫ロボが仮に破壊されるような事があったらすぐに脱出できる人材。そう、それは！
「カモン！エンダーマン！」
右手に生み出したのは黒い卵。それを目の前の地面に叩きつけるとそれは現れた。針金のように細い手足、三メートルはある巨体、そして全身が影のような漆黒。そう、マイクラ（バニラ）において強めの敵さんであるエンダーマン、俗称エンダー先輩である。スレ○ダーマンとも言われる。
このエンダーマン、敵ではあるが自分からは攻撃してこない。目と目が会った瞬間に凶暴化して襲ってくるという何処かのＳＣＰ（不思議生物）のような性質を持っている。更にこの先輩ワープ能力を持っている上にプレイヤーのＨＰをごっそり削る凄まじい膂力を持っている、つよつよ先輩なのである。しかしそのままではただ棒立ちして気ままにワープして何処か行くだけなのでＭｏｄをいつもの様に使います。
「コマンドオン。モッド・ＭｏｂＴａｌｋｅｒ・スタート。アイテムクリエイト・モブトーカー」
いつもの様に詠唱っぽくない詠唱をすると、ズボンのポケットに入れて置いたコマンドブロックが魔力を吸い、コマンドを実行した。
この【ＭｏｂＴａｌｋｅｒ】というＭＯＤはアイテムを一つだけ追加するＭＯＤだ。たった一つだけか、と舐めてはいけない。このアイテムは他のＭＯＤと絶対に被らない特徴があるのだ。
右手に出現したのは棒の先端に橙色の球体が着いた、いわゆるマイクのようなもの。これが唯一無二の存在、ＭＯＤと同じ名を持つモブトーカーである。

「へローへロー？ニホンゴワカリマスカー？」
　このアイテムの使い方は至ってシンプル、マイクのように相手に向けるだけでいい。それだけでこのアイテムは真価を発揮する。
「……何？」
　俺の目の前に居るのはもうただのエンダーマンでは無い。
　そいつはスレンダーな長身を黒い服に包み、エンダーマンの顔を模した帽子を被っている。長い茶髪を垂らし、紫水晶のような瞳で興味無さげにこちらを見ている。
　それは、少女の姿になったエンダーマンである。
　理解不能だって？このマイクは生き物を女体化して恋愛ゲームみたいに会話することができるようになるってとこだよ！
「おーオケオケ。無事通じるなコレ」
「……何も無いなら、帰る」
「あー待った待った！頼みがあるんだよ」
「……何」
　ふらりと身を翻し何処かへ歩きだそうとするエンダーマンを呼び止めると、。顔には一切出ていないが若干面倒くさそうな雰囲気を醸し出しながら立ち止まってくれた。
「人に聞かれると困るのではい耳貸してねーごによごにによごにによごにによ」
「……私が、しなきゃならない、理由がない」
　断られてしまった。やはりいきなりはダメか……どうすっかなー。
「……でも」
「ん？」
「……お菓子、くれたら、考えてもいい」
「どーぞどーぞ」
　はい取り出したるはホールケーキ！ただのケーキじゃないよー！直径一メートル、高さ五十センチの特大サイズのケーキだよー！もちろんマイクラ産だよー！
「……ありがとう」
　両手でケーキを受け取ったエンダーマンは顔には一切出ていない

が、雰囲気がほわほわしてる。なんか嬉しそうだ。
「……で、どうすればいい？」
「お？やってくれるんで？」
「……こんなの貰っておいて、やらないっていう、選択肢がそもそも、選べない。バカ」
「いきなりのバカありがとうございまーす。んじゃ説明しますんでアレの中にどうぞ――」
受けてくれることに感謝の礼をして頭を上げると、もう既にエンダーマンの姿は無かった。
「……遅い、早く来る」
声がした方を見ると、エンダーマンが白猫ロボに寄りかかっていた。
「いつの間に……ってワープか」
「……これ、何処に乗るの」
「頭の中に……ってだから早いわ！」
置いていかれたので一人寂しく梯子を登ると、
「……」
「……何か御用で？」
エンダーマンはしゃがみこんでジッ……とそれを観察している。
……梯子を登る俺を。
「……これ、そう使うんだな、って思ってた」
「まあワープしてたら梯子使わねえよな」
というかケーキが何処にも見当たらないのだが、もう食べたのだろうか……。Ｆａｔｅの女子は胃袋が特異点みたいな物だから有り得るな。
「……で、どうやるの、これ」
「随分やる気あるようで何より。では説明しよう！」
☆説明（かくかくしかじか四角いムーブ）中☆
「……大体、わかった」
「理解が早くて助かりますなー。んじゃ手筈通りによろしくー」
「……行ってらっしゃい」

エンダーマンに見送られながら、再び洞窟に潜るのだった。
「せっかくだし、エミヤに首貫かれた仕返しでもするかねー」
取り出したるは毎度お馴染みと化してきた透明化ポーション。これを風呂上がりの牛乳の如く一気飲みし、戦場まで洞窟を駆け抜ける。
（戦いまだ終わってないといいなー）
なんて呑気な事を考えていたから神様が天罰を下したのか。
戦場はなんか火球舞い火花舞い剣が降る熾烈なものと化していた。
（うわあ……ガチシリアスモード。あ、アイアンゴーレム。さてはぐだ子、スポーンエッグ使ったな）
以前ぐだ子に御守りとして渡したスポーンエッグ、日の目を見ることは無いと思ってたがＦＧＯが始まっていきなり出番があるとはこの理来の目を持ってしても見抜けなかった。
「良い加減倒れたらどうだ？」
「倒れません！私は、貴方を倒すまで絶対に！負けませんッ!!」
「盾の嬢ちゃんいい事言うじゃねえか。俺も俺の目の前で協力者が無残に殺られたんだ。お前だけは確実に焼き殺してやる」
「私達は貴方に負けて居られないんだ！リックの仇は取らせてもらうよ！」
（わー凄い真面目な発言。俺場違い感パないわー。……ぐだ子、俺の仇は取らなくてもいいんだぞ？）
生きてるし、生き返るし。カルデアのマイルームにベッド隠して設置したし。
ここまでシリアスだと……うん！ぶっ壊したくなってきたなー！
透明化ポーションの効き目を頼りに、気配を殺しながら岸壁に沿うようにエミヤに向けて歩く。
カチリ、と懐中時計のボタンを押し込んだ。瞬間、世界は流れを止めた。
（やっぱり時止めはチートやない？まあ便利だからいいけど。さてさて、何か弄れる所無いかなー）
エミヤを横から、後ろから、正面から、上から、間近で、じっくり

観察する。
「なるへそ、ズボンはベルトで止めているとな。タイツみたいなお肌ピッチリ謎構造じゃないのね」
では、喜劇的ビフォーアフターと行きましょうかね。
ベルトに動いたら切れる位の深ーい切れ込みを入れまして、髪の毛を額の中心ぐらいから後頭部にかけて一直線に剃りまして、その上から頭に麻袋を掛けます。
はい終わり。匠はなんということをしでかしてくれたのでしょう。
アーチャーなのに剣を使う戦闘職、動きやすさは必須なのに動くとベルトが切れてパンツが丸見えになってしまいます。これではとても戦えませんね～。更に髪の毛を剃ってから麻袋を被せることで二弾ドッキリになるんですね～これ。麻袋に驚いて取ったら恥ずかしい頭が公開されちゃうんですよねこれ～。これはもう穴があったら飛び込みたいですね～。という訳で一歩下がった位置に深さ二メートルの落とし穴を掘りました。真下には水を張ってあるのでダメージを受ける心配は一切ございません！
エミヤとぐだ子達の間に立ち、真横の壁に向かって歩く。ダイヤモンドツルハシを子供が木の枝を振るように岸壁に向けて振り下ろして、奥行二メートル、横幅一メートル、高さ二メートルの穴を掘る。一番奥に入って岩ブロックを一つ穴を塞ぐように下に置き、その上に石の半ブロックを設置する。これで覗き穴を確保したのだが少し穴が大きいのでその辺に落ちてた石を詰めて穴の大きさを調整したら準備完了。
「そして時は動き出す」
カチリ、と懐中時計のボタンを押し込む。
「何だ!?急に視界が暗くなったぞ!?」
最初に動いたのはエミヤだった。あの麻袋穴開けてないから真っ暗なんだよな。
「くっ、何をしたカルデアァ！」
「何もしてないよ!?」
ぐだ子や、お前さんの何があっても聞かれたことに律儀に答えると

ころ、好きやで。
麻袋を取ろうとしている時に、大きく動いたからだろう。
バツン！と良い音を立ててベルトが切れた。パサッ、とズボンが地面に落下する。
「ぬおっ!?」
急に重心がズレたことで崩れたバランスを取ろうと一歩後ろに下がった。
しかしそこに床は無い。
「ウオアアアアッ!?」
エミヤが穴の中に姿を消した直後、派手な水飛沫が穴の中から吹き上がった。彼はきっと特有の感覚を味わっただろう。そう、階段を降りきったと思ったらもう一段会った時に感じる突然の重力に似た者を。
カルデアの面々を見ると、驚いている者と笑っている者に別れている。遊希だけなんかこっちを見ているのだが、もしかして気付かれてる？
「ははははは！おーいアーチャー大丈夫か――――うっはははははははは！」
キャスターが笑いながら穴の中を覗きに行くと、何を見たのか――多分麻袋の中身（ストレートハゲ）でも見たのだろう――膝から崩れ落ちて泣く程笑ってる。
「キャスターさん一体何を……えぇ」
マシュが穴を覗いて絶句の表情を浮かべた。
「マシュもキャスターも何見てるの？」
「せ、先輩、これは……」
「はははははははははっゲホッゲボッ、くふっはははははは!!」
「キャスターがキャラ崩壊するくらいの何かがこの中に……ごくり」
「先輩、いきなり覗く前に心の準備を――」
「あはははははははは！」
「先輩!?もう覗いちゃったんですか!?」
おーおー、なかなかの混沌（カオス）が産まれていらっしゃる。……遊希さん

そこどいてくれ、見えないから。もう気付いてるよアピール要らんから。覗き穴が君の目で埋まってるのよ、近すぎよ君。

何故こんなにも間が空いたのかは本人もよくわかっていないんだ

あれから数分経ったと思うが如何せん状況が把握出来ない。だが体感的には二ヶ月か三ヶ月程経過しているような気もする。まあそんな訳が無いのだがそれもこれもうちのメイドラである遊希が覗き穴から覗き返して塞いでいるからである。

「遊希さんや、どいておくれや（ボソッ）」

「なにゆえのぞきこういをしているのかをおしえてくれたならどくぞ（ボソボソ）」

「なんか俺死んだみたいになってるから出にくいじゃん？（ボソッ）」

「に、さんかげつもとうこうしなかったらエタってるはんていされるから、いまさらしんだところでもんだいないぞ（ボソボソ）」

「生きとるわっ！（ボソッ！）」

「遊希さん、一体何を見ているのですか――えっ!?」

マシュの声が聞こえたと同時、遊希が横にズレて覗き穴が空いた。そこからラベンダー色の瞳がこちらを覗き込み、驚愕に目が見開かれた。

（バレたあああああああっ！）

「せっ先輩!!理来さんが、理来さんが!!」

「分かってるよマシュ……リック、何が起きてるのかまるで分からないけど、仇は取ったよ……」

「違いますよ!?先輩、アーチャーさんをつついてないでこっちに来てください!!」

「もうちょっと、まだ私の怒りやら困惑やらが抜け切ってないから……」

「黄昏ながらつんつんしないでください！理来さんはまだ生きてますから！」

「――――え？」

（わーい、かんっぜんにバレター！ワッショーイ！）

死んだと思った人が壁の中から覗いていたと知ったらぐだ子は何をするのでしょうか、わたくしとっても恐ろしゅうて堪りませんわ……。

マシュが退いて橙色の瞳が穴から覗いた。

「……」

「……は、はろー？」

気まずッ!?すっげー気まずい！頼むから何か言ってくれ！俺混沌な空気を作ることしか出来ないから！

冷や汗ダラダラな俺を放ってぐだ子はスタスタとどこかへ行ってしまった。

（え？放置プレイ？）

「ゴーレムさん、お願いがあるの」

どこへ行ったと思ったがどうやらアイアンゴーレムの元へ行ったらしい。しかしアイアンゴーレムにお願いなんて何を――。

「あの壁、ぶち抜いて？」

……はい？

アイアンゴーレム、そいつについて説明することは何個かあるが今は一つだけでいいだろう。アイアンゴーレムは腕力が凄い。ある程度のモンスターなら両手を振り上げて吹き飛ばしてしまう程だ。それが現実に居たなら、果たしてその威力は如何程のものだろうか。

急に視界が銀色に、いや、鉄の色か？になった。

（あ、ヤバいやつね？これ）

そして、俺の隠れていた壁が吹き飛んだ。

（でええええええええええ!?）

唯一幸運だったことはブロックで作った壁だったことだろう。本物の岩壁だったら砕けた勢いを保ったまま俺に全弾命中していただろう。

ブロックで作られた岩壁は破壊され、手のひらサイズのキューブとしてフワフワと地面の上に浮いている。そんでもって隠れ蓑が剥がれた俺は絶賛ぐだ子とマシュの指示に従うアイアンゴーレムに見張られています。おいゴーレム、花を添えるなまだ死んどらんわ。

「一体何の音よ!?」
「おい嬢ちゃん何があった!?」
あーこの声は所長とキャスニキですねー。
・・・オワタ。
「リック?何か言うことは無い?」
「反省ちょっと、後悔ＺＥＲＯ」
「わかった、じゃあそこに座って?」
「いやここ直に座ると砂利が刺さって痛い」
「すわって？」
「……はい」
この後全員から怒られた。何人か泣いていた上に俺が少々巫山戯たせいでもあるので、何をするでもなくただ静かに聞いていた。

「マヂサーセンデシタ」
どうも、一日の挨拶は土下座からはじまります。お久しぶりです理来です。今やっと説教が終わりました。何かイベントでも起きると思った?残念!ありません!せいぜい俺の華麗な土下座を見るがいいわ!
「本当に反省してる?」
「もう命をかけたネタはやりませんはい」
「よし!許します!」
「ははー!リッカ様は海より深い慈悲をお持ちの方でありますー!」
「それはちょっと言い過ぎじゃない?」
「せやなー」
「せやねー」
「あの二人いつもあんな感じなのかしら……」
「でも、先輩はとても楽しそうな顔をしています」
「まあ何はともあれ生きてて良かったな」
「マシュ!所長!キャスターさん!この特異点も終わりが近いよ!全員突撃だー!」
「はい!マシュ・キリエライト突撃します!」

「待って盾置いてぶつかるぅー！」
　そんなこんなで、すったもんだ有りながらも一行は奥へと進むのであった。
『あれ？僕の出番は？』
「チキンはしょくたくにならぶのがしごとだぞ」
『チキンじゃないよ!?』
「遊希さん、ドクターはチキンではありませんよ！」
『マシュ……！』
「ドクターはビビりでどうしようも無いドルオタで肝心な時に役に立ちませんが私達の大切な人である事に変わりはありません！」
『マシュ……』
「あ、ドクターがガチャで聖晶石全部溶かした顔になった」

多分誰もやってない冬木ランチタイム

やあやあ、待ったー？皆大好きリックお兄さんだよ！今ねー、お兄さんとーっても困ってるんだ！え？なんでかって？それはねー。
「参ったわね……全ッ然起きる気配が無いわ……」
「もうこいつ焼いても良いんじゃねえか？」
「待って下さい!?貴重な情報源を燃やさないで下さい！」
「つんつんつんつん」
「先輩はつつく事を止めてください！」
『頑張れマシュ！この場を纏められるのは多分君だけだ！』
「ドクターも手伝って下さい!!」
シャドウアーチャーが気絶したまま目が覚めず、どうするかで皆が揉めてやがります。このままでは先に進めませぬぞと言った状況がかれこれ十分程続いているのだ。ここで俺が会話に混ざらないのはさっさと先に進んでアルトリアオルタを吹き飛ばしてカルデアに帰りたいからだ。これ以上長引くようであれば俺はアルトリアオルタ戦でＳＣＰを解放するぞ。
「てな訳で遊希さんや。どうする」
「……」
そこにはすやすやと眠るメイドさんの姿がありましたとさ。めでたしめでたし。
……いや、何で寝てるの？
「おーい、遊希さーん？生きてるかー？」
「はっ、……にかげつほどほうちされるゆめをみた」
「なんだそりゃ？」
何よく分からない事を言っているのやら。そんなことを思い浮かべたが言葉にするのは辞めておいた。
『更新忘れててすみませんでした＜（＿　＿）＞』
「で、なにがどうしてどうなったのだ？」
「何時から寝てたし……かくかくしかじかだよ。分かったか？」
「なるほど……うむ、わからぬ」

でしょうね。だいぶ理解しようとしてたけど諦めてましたしね。
「シャドウアーチャーさっさと撃破、ところがぐっすりおねんねタイム、さっさと起きろやエミヤシロウ。オーケー？」
「エミヤとはどちらさまなのだ？」
無言でシャドウアーチャーを指差した所、指先に釣られるように遊希の視線が動いた。猫かな？
「……あれはとめなくてもよいのか？」
「あれとはなんぞや……ウワァオ」
なんか所長がシャドウアーチャーに高速往復ビンタしてる。めっちゃ良い音するやんけ。
「嬢ちゃん、その辺にしてやれ……見ていて可哀想に思えてきたぜ」
クー・フーリンが静止に入らなかったらそのまま継続していただろう。しかし、所長はシャドウ化しているとはいえサーヴァント相手に何故このようなことが出来たのか……。謎ですな。
「そうね。ここまでしても起きないならもう燃やしてもいいんじゃないかしら」
「所長!?早まらないでください！多分そろそろ起きますから！」
あ、俺完全に理解したわ。
いきなり所長を引き継いだ事による度重なるストレス。それに加えて知らない土地にワープして敵に襲われ、爆発によるマスター候補達が瀕死になり生殺与奪の権を勝手に握らされ、俺による巨大白猫ロボダンスを見せられ、いつの間にかメイド連れてきた俺による特異点とは思えぬ混沌とした空気。更にはシャドウアーチャーとの戦闘で俺が死んだかと思えば壁の中から出てきてシャドウアーチャーが意味不明な戦闘不能状態となった。これらのカオスな要素を精神不安定な所長に投与した結果出来てしまったのが！
「はぁ……レフは何処かしらね……いい加減に来てくれると助かるのだけども」
一時的狂気（モウドウニテモナーレ）所長であるっ！
「つんつんつんつん」
「つつくの辞めーや」

「あーれえええ……」
何時までもつつき続けるぐだ子をシャドウアーチャーから引き剥がす。
ダメだ、全員がグダグダしすぎて進まない。ここは俺が場の流れを作らないと進まぬ！
「全員、聞いて欲しい事があるんだ。俺達はここから先に待つ困難に打ち勝つためにも、やらなくてはならない事があるんじゃないか？」
この先のアーサー王はこんなグデグデ展開では乗り越えられない。俺一人が生き残ったところで意味は無いのだ。全員が生き残るためにも俺が出来ることをやるだけだ。俺が出来ること、それはっ！
「これより、ご飯の時間だ！」
とりあえずご飯食べよう、アイムハングリ。
☆支度中（レッツクッキン）☆

「シャドウアーチャーが起きるまで食事タイムにすることになった。……ここまでは良いのだけど」
オルガマリーの視線の先、そこには――――

「パティ班！そっちまだ焼けないの!?」
「もうちょい待ってよ～。バンズ班こそ美味しく焼けたの～？」
「レタス班と！」
「トマト班は！」
「何時でもオッケーです！」
「ポテト班、もう揚がっとるでー。……ちょっとくらい食べてもバレへんかな？」
「二番メイド隊、食器の用意が完了致しました！遊希メイド長！指示をお願いします！」
「うむ、わたしのぶんもたくさんつくるといい。わたしはとてもおなかがすいたのだ」
視線の先には、いつの間にか現れた複数のメイドが理来の手作りキッチンに集まり料理を作っていた。なお、メイドラゴンではなく普

通のメイドである。
「あの子たち誰よ!?どこから湧いてきたのよ!?あとメイド長サボってんじゃないわよ!」
「サボりではないのだ。わたしはキチンとしょくむたいまんしてるのだ」
「それをサボりって言うのよ!?」
「まだかなー（ジュルリ）」
「美味しそうですね!先輩!」
『そっちだけ美味しそうな物食べてずるいぞー!後でこっちに送ってね!』
「アナタ達は何でそんなに呑気で居られるのよ!?」
「所長、ツッコミご苦労様ですお」
　お巫山戯テンションの理来がどこからとも無く現れた。
「アナタのせいでしょう!?どこからあの子達湧いてきたのよ!教えなさい!」
「メイド時空から雇ってきました」
「……はい？（・△・）」
　最早理解を諦めた所長を他所に着々と調理は進んだのだった。
「ご注文のハンバーガーセットやでーモグモグ。ドリンクは冷水やけどもモグモグ他に品が無いんで堪忍してやーモグモグ」
　運んできたのはポテト班のメイドだった。……もう聞くまでもなくつまみ食いしている。いや、結構ガッツリ食ってる。
「口元にポテト着いてんぞ」
「ハッ!?しもた!……あれ？着いとらんやん」
　口元を触って確認しているが、そもそも何も着いていない。と言うより全て口の中に収まっている。
「お前の分のポテト無しな」
「そんなご無体なー!?」
「結構美味えなコレ（ムッシャムッシャ）」
　崩れ落ちるメイドを他所に別のメイドが運んできたハンバーガーセットに齧り付く冬木のキャスター。

「アー！キャスニキもう食べてるー！」
「先輩！私達も頂きましょう！」
「うん！所長も食べ……所長？」
「べりぃでりしゃす（ー〜ー）」
「し、所長がとても映せない顔になってる……」
「美味しいと思っている事だけは伝わってきます……」
「誰のせいだ！所長をあんな顔にさせたのは！」
　その場にいる全員（理来以外）が理来を指差した。逆に何故指刺されないと思ったのか。

キチィの三分クッキング・準備編

「「「「ご馳走様でした！」」」」

ハンバーガーセットはとても美味しかった。小学生並の感想だが語彙力ゼロかよｗｗｗとか言って叩こうとした人、ちょっと待ってくれ。そもそもこんな洞窟の中で食べるハンバーガーセットの食レポした所で『僕・私も食べたいなー』となったとしても同じシチュエーションで同じ料理を食べることは不可能なのだ。考えて見てほしいのだがもし急に俺が、バンズは俺のマイクラ世界の畑で育て収穫したばかりの小麦を使用し、香り豊かな風味が口いっぱいに広がる。一口齧(かじ)れば焼き立てフワフワ食感、思わずほわっとした気分になってしまう。とか語り出したらどう思う、なんだコイツって思うだろ。俺もそう思う。

時間も経ったことだし、そろそろ縛って放置してた影茶(シャドウアーチャー)も起きた頃だろうか？俺が見に行っても良いが先程の説教の二の舞になりたくないので誰か他の人に見に行ってもらうしかないか？……マシュかなー。盾持ってるし鎧着てるし……キャスターだといくらクー・フーリンとはいえランサーの時より反応速度とか落ちてそうだし。よっしゃマシュ、君に決めた！

「マシュ、調子はどうだ??」

「はい、野菜は瑞々しくバンズ、パティ共に焼き加減が絶妙でジャンクフードとは思えない丁寧さを感じました」

「セツコ、そっちやない。シャドウアーチャーや」

「あっ……し、失礼しました。確認してきます」

間違えた事が恥ずかしいのかほんのりと頬を染めて席を立った彼女を見送る。

「マシュ、一緒に行こうよ。何かあったら私が何とかしてあげるから！」

ちょい待てぐだ子さんや、君護られる立場だから。……走って逃げるくらいなら出来るか？オリンピック日本代表クラス超えの脚力と噂されるレベルだし……走ってアメリカ横断出来そう。

「リックも行く？」
「俺は後片付けしとくから二人で行ってきな～」
　んじゃ、俺はメイドさんらをメイド時空に戻すとするかね。
「メイドさーん、集合！」
　☆メイド帰還準備中☆
「２８、２９、３０。よし全員揃ったな」
　三十人もメイドが揃っていると中々に壮観だな。……待てよ、三十人？
「遊希何処行った？」
　一際目立つメイドラゴンが居ないやん……勝手に何処行ったあのダメイドラ。
「遊希メイド長なら―！」
「出前に行くと言っていましたー！」
　レタス・トマト班班長のメイドが息ピッタリに告げた。
　出前って何処の誰がだよ……誰か止めようぜ？確実にそれサボりだぞ。
「リック助けてー!!」
　メイド達を点呼取っていたらぐだ子が走ってきたでござるの巻。速すぎて風が吹くレベルである。
「どうしたのび太くん。影茶が縄切って逃げたか？」
「凄い！大体当たってるよ!?じゃなくて、今マシュが抑えてるからキャスニキを呼んで！あとリックも来て！」
「ほいほい。よっしゃ行くぞメイド諸君」
『畏まりました！（×三十）』
「メイド軍団（三十人）、とっつげきじゃー！」
『おおおおおおおおおお！』
「え、メイドさんも戦うの!?」
　ぐだ子が戸惑っているが、マイクラに置いてメイドとは家事も戦闘も出来るプロフェッショナルだぞ。しかもお砂糖で雇える安心安全低価格ぞ。あと可愛い。

亡霊でも出てきそうな程薄暗い洞窟の中、鈍い金属音が幾度にも渡っても響き渡った。
その音の発生源は、黒き影の如き男性と、身の丈よりも大きな盾を持つ少女。男性――シャドウアーチャーが少女――マシュ・キリエライトを攻撃する音だ。
「ほう、中々に堅いな。だが隙が多過ぎる。そんな状態で彼女と戦うつもりだったのか？」
「違いますッ！私は唯（ただ）！会って話がしたいっ！何故こんな事をしたのか、聞きたいだけです！」
戦況はマシュが劣勢と言ったところか。遠距離攻撃持ちのシャドウアーチャーに対してマシュは大盾による殴打しか攻撃手段を持たない。更に言えばマシュはクラス・シールダー、例えるならば頑丈極まりない城壁のようなもので攻撃手段は殆ど無いと言えよう。
それに対してシャドウアーチャーは弓による攻撃の他にも様々な宝具を投影魔術により再現し放つ戦法による高威力遠距離攻撃が可能。更に壊れた幻想（ブロークンファンタズム）で投影した宝具を破壊、爆破する事でより威力の高い攻撃を繰り出せる。その上干将・莫耶による近接攻撃も得意と実に隙のない英霊である。
「話？君はまだ気がついていないのか？最早話してどうにかなる段階などとうに過ぎている」
干将・莫耶で盾を連続で切りつけつつ、投影した宝具を全て異なる位置から放ち防ぐ難易度を際限なく上げていく。
「それでもッ！私は話さなければいけないんです！人はッ！言葉で意思疎通をして協力し合う事でより良い未来を手に入れました！そしてそれは今に繋がっています！」
激しい攻撃は一撃でも当たればその隙を着いて一気に仕留められるだろう。全ての攻撃をギリギリ防ぐ彼女の額には汗が浮かんでいた。

「それはとても素晴らしい事です。ですが、話さなければ何も伝わりません！何故このような事をしたのか、或いはさせられたのか！聞かなければ何も分からないままなんです！何かしなければならない理由があるなら私達がその理由を取り除きます！人理に刻まれた英雄がこんな事をするとは私にはとても思えません！だから、だからッ！」

投げつけられた干将・莫耶を弾き飛ばし、盾を構えて駆け出した！

「其所をッッ、退いて下さあああああああいッ!!」

投影された二本目の干将・莫耶をシールドバッシュで突破し、そのまま接近し盾を振りかぶる。次に彼女が行動すれば確実にシャドウアーチャーを倒せるだろう、それ程に気迫に満ちた行動だった。

ああ、しかし、彼女は余りにも遅過ぎた。

「それは理想と言うものだ。世の中には私のように躊躇いなく人を殺す英霊もいるのだ」

シャドウアーチャーが新たな干将・莫耶を構える。彼女の後ろからはどうやって動いているのか、先程弾かれた干将・莫耶が彼女の背後に飛んできていた。

「せめて痛みは一瞬で終わらせてやる。理想と共に眠ると良い」

彼女は背後から飛んで来る干将・莫耶に気がつくも、防げないと確信した。

「――――鶴翼三連」

異なる角度から二対の干将・莫耶が高速で飛来し、目の前からシャドウアーチャーが切りかかる。振りかぶった盾は今から全ての攻撃を弾く事は出来ず、異なる位置から同時に繰り出される攻撃は流石に盾一つで防ぐ事は不可能だ。

（先輩、すみません。私は――――）
そして、彼女の生命は此処で尽きた。

かに思われた。
「何っ!?」
結論から言おう。シャドウアーチャーの鶴翼三連は全て防がれた。
「――全く、俺が居ないとすーぐシリアスになるんだからキツいよな」
何時からそこに居たのか、全身を薄い紫色に輝かせた宝石の防具を身にまとった男がいた。飛来した干将・莫耶とシャドウアーチャーが持つ干将・莫耶を両手別々に持った盾で完璧に防いだその男は――。
「はいシリアスは退いた退いたー！こっから先はシリアルのお時間よー！」
シャドウアーチャーに見えるように親指を下に向け、巫山戯た態度でシャドウアーチャーを挑発した。